東方物理録

熱海　麗

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺は普通の高校生　山神　麗火不慮の事故で死んでしまった

死後の世界はどんなものか考えていたがロリの神様はなかなか俺を死なせてはくれないらしい

『自分の体に関わる事なら大体操る事が出来る』といった謎の能力を幼女の神様にもらい

俺は名前を麗火から零（レイ）へと変え、新しい世界に飛ぶその直前に

「あ、そうだ、レイの行く時代は遥か古代、まだ、月人が地球にいた頃の時代ね

あと、ロリとか幼女いうな」

「えー……じゃあね……えええええええええっ!?」

目次

一話　始まり　1
古代都市編
二話　新しい世界　7
3話　緑狼との出会い　12
第四話　都市　18
第五話　ツクヨミ様　24
第六話　明日に備えて　30
第7話　レイ、出勤？　36
第8話　レイの能力の異常性　44
第9話　レイ、初の対人戦　50
第10話　都市外周警備　55
第11話　緑狼の気持ち　59
第12話　レイと永琳と慶　64
第13話　〝長〟の実力　70
第14話　『妖怪の都市の一斉襲撃』　75

一話　始まり

俺は普通の高校生　山上　麗火だ
何唐突に自己紹介を始めたのかと疑問に思うだろうがこれは自分はどういった存在かの確認である
何故そんな事をするかと思うだろうが
俺は『今、死んだ』のだ
死後の世界というものには色々な考えがある
閻魔様の下で裁きを受けて天国や地獄へ行く
天国や地獄など存在せず魂又は霊的なものになって死んだ場所の周りをさまよい続ける
などなど多くの考えがある
「で、おれは今からどんな事になるのかねぇ」
今、俺がいるのは何もない真っ白い空間だ
これで死んだ場所の周りをさまよい続けることはなくなったなぁ

今さらだが今までの人生に悔いはない。あるとすれば見たいアニメがどうとか
そんな些細なものだけしか残ってない
そんな事より死後の世界の話だ
「天国に行くのか地獄に行くのか記憶を消されて転生するのか」
こんなことを言っているが地獄に行くほど悪いことはしてないから出来れば天国へ行きたい
「残念ながらあんたは天国へ行く事も地獄へ行く事もないよ」
そうか、ならどうなるの…か……
「!?　あんたはだれだ?」
言葉では落ち着いているみたいだが内心はかなり驚いてる。なんだって唐突に後ろから
話掛けられなくてはならないのか。心臓止まるかと思ったぞ。あ、死んでた。
「なにお決まりみたいなこと考えてんの、後ろ後ろ」

そんなことを言われたので振り返えってみるとそこには小、中学生位、つまりは１３．４歳くらいの女の子がいた
「幼女!? お前も死んだのか？」
「幼女言うな、で、きみ死ぬ前の事覚えてんの？」
目の前にいる女の子、白い服を着てるからとりあえず『白いの』
白いのはいきなりそんな事を聞いてきた
「まあ、覚えているけど」
「そう、きみ珍しいね。あと、私は『白いの』じゃなくて『神香』っていう名前があるの！
神様の『神』に香るの『香』で『みか』！ 名前の通り神様よ！」
って目の前の白いのがいっｔ「だから！『神香』だって言ってるの！」
……白いのが「だから！神香だって」
…自称神様が ゴスッ！ 殴らなくてもいいじゃない…
「てか、神サマ心読めてるよね」
「結局私の呼び方は神サマなんだ。まあ、神様何だからそれくらい普通よ」
神サマはえっへんと言いたげな表情で腰に手を当て胸を張っている
「へー神様ねえ、まあ、死後世界んなんだから神様位いてもいいのか？やっぱり世の中は
不思議な事ばかりだなあ」
「私が心を読めるって知ったら思った事全て口に出すキミも十分不思議よ」
呆れたような顔をして神サマはいった
「で、そんな神サマが俺に何の用？天国や地獄にいけないらしいけど『間違って殺しちゃったから転生させてあげる』とかそんな感じ？」
「おーおーキミは私がそんなヘマするとおもってんの？まあ、転生させてあげるけど」
マジか適当に思ったことを口に出すのも良いもんだなぁ。でも何故に俺なんだ

「やっと本題に入れるよ。私は神様の中でも転生神っていう存在なのよ。
名前の通り死んだ人間の魂を、別の時間、別の世界の生き物の赤ちゃんに『適当』に送る
仕事をしてるんだけど」
おいこの転生神サマ適当とか言っているぞ
「しょうがないじゃない、普通、生き物の魂はここの空間に来るまでに自分の記憶が吹っ飛んじゃうんだもん。記憶がない魂なんて元が人間かどうとかなんて分かんないんだもん」
なんて頬を少し膨らませて言っているがこの子可愛いな…じゃなくてそうなら仕方ない
俺だってそうする
「かっ…可愛っ…じゃなくて！いつも通りキミをどこかの世界に吹っ飛ばせようと思ったけどキミが生きていた頃の記憶が残ってるみたいだったから少し興味を持っただけ！」
なるほど、神サマが自分に近いた意味は分かった、しかし
「それが、どうすれば俺を転生させる事につながるんだ？　嬉しいけど」
「それは……私の興味よ!!」
なに言ってんだこいつ
「だって私、何十年もここで何だか分かんない魂をどっかの世界に飛ばし続けて
暇だったの！」
だだっ子の様な勢いでまくし立てる神サマ。本当に子供じゃねえか
つまり俺みたいな記憶を残してここに来た奴をソイツの好きな世界に飛ばしまくってたって事でｏｋ？
「おしい！私がこの事を思い付いたのが数百年前！その後にも前にも記憶を持ってここに来た奴
は一人も居なかった！だからここまでテンションが高いの！」
マジか、神サマも苦労してんだな

「でも落ち着け顔が真っ赤になってるぞ」
スーーーハーーーーー……スーーーハーーー…ゲホッゲホッ
おいおい女の子らしからぬ音がすんぞ大丈夫か？
「ふう、落ち着いた。と言うわけでキミには転生をしてもらいたいんだけど……
キミの知識を見せて貰った。君の脳で一番よく知識が溜め込んであるのが……
東方プロジェクトの知識が一番ね。というかそれ以外の知識が偏り過ぎてない？」
神サマは驚いたような顔をしている。確かに豆知識等は覚えるのは得意だけど
英単語は覚えられないんだよね。あるある
まあ、東方の世界に行けるってことでいいのか？
「うん、そういう事、本当は転生するかどうかの確認をしたかったけど
その様子じゃ確認は必要ないみたいね」
当たり前だ。どんな理由があれ、転生出来るなら喜んで転生するだろう
「転生先、東方プロジェクト」
「お、何メモしてるんだ」
「キミを間違った世界に転生させない様に転生先をメモしてるの」
「どじっ子か「違う！」はいはい分かった分かった」
「あと、キミの知識を見せて貰った限り能力とか種族が決められるらしいけど
こっちで決めちゃっていい？」
えーあんまりザコ過ぎずチート過ぎずがいいなぁ
「あーそこは大丈夫、キミの性格も考えた上で決めたから」
そういって神サマは一枚の紙を見せてきた
・転生先　東方プロジェクト（世界Ｎｏ　２９４８２５４６４５）
・種族　人間　不老不死
・能力　身体を操る程度の能力
↓己の筋力、動体視力、再生力、身体の形、己の身体

の事なら大体操れる
・縛り　霊力の使用不可
↓生命維持の量しか使えない
↓といっても霊力は生きていれば勝手に貯まるので
『貯まるけど使えない』状態

こんな事が書いてあった
「己の身体の事なら大体操れるってことは筋力をめちゃくちゃ上げてぶんなぐれば大体の敵は倒せるのか、それに不老不死ときたもんだこれはかなりチートじゃねえか」
「まあ、そうなんだけど霊力は攻撃には全く使えないじゃない、
これで幽霊関係の敵は倒せないし、一度に使える身体強化は一つのみ、
しかも攻撃力、再生力、防御力のパラメーターも上げられる値に限度があるから意外と厳しいはずよ」
つまり、攻撃力を最高まで上げても防御、再生力は普段どうり。
しかも物理攻撃が効かないやつらは倒せないのか
これ、かなりつらくないか
「まあ、その為に不老不死がついているんだけどね」
そうか、大体分かった
そして能力とかが書いてあるさっきの紙をもらった。なんでも向こうの世界に着いたときに
基礎能力、自分の体力などを底上げしてくれるという
「じゃあこれで準備はおしまい！二度目の人生を楽しんできてね！私はこっちから
キミの事見てるからー！」
「そうか、分かった！あと、俺の名前はキミじゃない！麗火…いや、レイだ！
新しい世界の俺の名前はレイだ！じゃあな『神香』」
「！……じゃあね『レイ』」

こうしてレイの新しい人生がはじまったのだ

「あ、そうだ、レイの行く時代は遥か古代、まだ、月人が地球にいた頃の時代ね」
「えー……え！うっそ!?」

こうして俺の『東方物理録』が始まったのである

古代都市編

二話　新しい世界

「あと、レイの行く時代は遥か古代、まだ、月人が地球にいた頃の時代ねー」
「えー……じゃあね……えええええええええっ!?」
　一つ言っておくがレイは絶賛落下中である。
「くっそぉ、今度見つけたれらぶん殴ってやる」
　そんな事をしていると地面が見えてきた。地面は森の様である
「能力の使い方を学べってことか？『防御力を１０倍』に！」
　今まで静かだった森の中にズドンという音が響いた。
　そこには足があらぬ方向に折れ曲がった零の姿が、
「あああっ！くっそぉ最悪だ再生力…いや、『足の痛覚を０』に！」
　足が曲がったまま再生されても困る。まず、足を形だけでも元に戻さないと…
　零は痛覚を無くして無理やり足を元の方向に戻そうとした。太い枝を折る様な痛々しい音がする
「んで、『痛覚を元に』して『再生力を１０倍』に！」
　同時に激しい痛みが襲ってくるが徐々にその痛みも引いていく
「そういえば、神サマがくれたメモが新しい世界に着いたときに基礎能力を上げるとか何とか言ってたな」
　そう言って神サマがくれたメモを見ると、
　過去の時代に送ってゴメンね…
　伝え忘れたけど零の能力について色々追加したよ
・今のレイは能力を使わなくても大人五人分くらいの
　強さがあるよ
・今の零の最高の強さは通常の十倍で攻撃力なら中級妖怪と同じくらい
　そして百年生きるごとに最大の強さが二十倍、三十倍、
　といったふうに最大の強さが上がっていく

・ある一定の数の（零を殺そうとする）妖怪を倒すと
自分に使える能力の数が増える
・この紙は読み終わると火が点いて燃えます
これが追加した内容です
もう、零に伝える事はないよ
第二の人生を楽しんでね

何か書いていることが増えてる。その直後、火が点いてメモが灰になった。
つまり長く生きればその分強くなるってことか。とりあえず食べる物を探すか
いくら不老不死だといってもお腹はすくだろう
「何か食うもん無いかなぁ」
「オ前ガ食イモンニナルンダヨ」
「え？」
後ろには大きさ5メートル位のヘビがこっちを見ていた
長さが2メートル位のヘビなら見たことあるんだがこいつは人間を丸飲みできるのではないかと思うほど
大きなヘビだ
「言葉を話すってことはこれが妖怪なのか」
ここの世界の妖怪だからといって皆人間の見た目をしてる訳じゃないみたいだな
とりあえず腕試しだ
「攻撃力を十倍にして、おらぁっ！」
しかし、攻撃力が上がったものの腕の振る速さは神サマの強化をされても
ヘビの妖怪には軽く避けられてしまう
「フッ、遅イナ。弱イ人間ゴトキが調子二乗ルナ」
イラッ
妖怪ヘビは余裕だというふうに動かない
今がチャンス遅いならスピードを上げればいい

「脚力を十倍に」
おもいっきり地面を蹴る、轟音をたてながらヘビの方向に飛んで行く
ヘビまでの距離は十五メートル位、この勢いで
「腕力を十倍に」
ドンッ！
何かが破裂する音がした
目の前には体の上半分が粉々になったヘビがいた
「あ、やり過ぎた」
辺りに血の匂いが充満する。とりあえずこの肉塊を集めて干し肉でも作るかな
ガサガサッ
!? なんだとりあえず近くに何か居るみたいだ
「聴力を十倍に」
聴力を上げて相手がどこにいるのか探る
……囲まれてる！しまった血の匂いに釣られたか
物音がする方向から察するに相手は五体。少々面倒くさいな
しかし、十倍の脚力の勢いプラス十倍の腕力で相手が粉々になったから
行けるか？
近くの野球ボール位の石を拾い上げ
「腕力を十倍に、えいっ！」
えいっといった割にはキュウンッといった音がして近くに生えてた木にぶつかって木が倒れた
それを見たのか見てないのかまた、ガサガサッといった音がして囲っていた妖怪たちは居なくなった
「うん、追い払えた」
こっちの方が全然楽だ。いくら妖怪とはいえ悪い事はしていない奴まで殺す事はないからな
あいつらが俺を襲ってきたのかただの野次馬なのかは分からないからな

「とりあえずこの肉は集めて干し肉にするとして火でも起こそうかな」
火のおこしかたは知らないけど木でも擦ればいいんだっけ
そんなことを考えてたら突然声が聞こえた
「何者だ！ここは都市の近くだぞ！
そんな声を聞き、振り返ると深緑の髪をし見た目１５．６才位の女の子が
腰に手を当ててオレの方向を見ていた

少し前…
???サイド
やってしまった。まさかこの私がここまで都市の近くに妖怪を寄せてしまうとは
しかし、最近は都市の近くに集まる妖怪が多すぎる
さすがに　都市の周りの森全てを監視するのはきつくなってきた
都市の内部は部下たちに任せているが…くそっこのままではいつか都市の中に
妖怪たちに入られてしまう
そしたら部下たちが妖怪を対処できるかどうか…
今、都市の西地区外周の森に妖怪がはいってきたとの報告をうけた
その妖怪がいるであろう場所に全速力で向かっているのは
半径五十キロもある都市の外周を一人で守っている妖怪『緑狼』である
妖怪なのに人を守っているという不思議な妖怪
しかし、都市の人間からの人気は高い
本来は対立する立場の人間に愛されているからこそ
都市の人間を死なせたくないから
危険な都市の外周を一人で守っているのだ
「確かここら辺にヘビ妖怪の団体がいるはず」

ヘビ妖怪の団体は最近長く生きたことにより妖怪化した妖怪が
長をしているヘビの集まりで、最近は長のヘビ以外にも知能を持った
ヘビも出てきた
「いい加減あいつらもちゃんと処理しないとまずいな」
最近は妖怪たちにも私の噂が広がって森に近寄る妖怪も減ってきた
あの妖怪は最近までさほど力をもっていなかったが
ここまで都市の近くに寄って来るならば倒すしかあるまい
ドンッ！
何かが破裂する音がした。
なんだ？ヘビ同士で戦っているのか？しかしそれならば何故物が破裂する音がするのか
遠目にヘビ達が逃げて行くのが見えた。しかし、そこに長のヘビがいない。
何かがおかしいあいつらは何時も長のヘビにくっついて行動している
他の妖怪との勢力争いで長のヘビが死んだのか？それならその勝った方の妖怪を処理すれば
いいのだが…
!?
人間か？いや、人間は都市から出られない、というか外になんか出たがらない
なら妖怪？しかし妖気を感じられない
そんな奴がヘビの長を粉々にしていた
人間か？しかしそんなやつが妖怪の中でもかなり強い部類に入るヘビの長を
一撃で粉々に出来るのか？
なんなんだあいつは
戦ってみたい!!!!

3話　緑狼との出会い

「何者だ！ここは都市の近くだぞ！」
　という声を聞き後ろに振り返ると緑の髪をした高校生位の女の子がいた
　次はなんだ？都市の近くとか言ってたから都市の警備の人かな？
「私の名は緑狼、見てたよ、キミ、あのヘビを粉砕したところを」
「え？ああ！で、でもあれは、あいつが襲ってきたからで…」
「別に妖怪を倒すのが悪いとは言ってないよ…ただ、一撃で妖怪を吹き飛ばす様な奴が都市の近くをうろつかれると困るんだよ」
「待て、俺は都市に危害を加える様なことはしない！ただ、都市の中に住みたいだけなんだ！」
「何を言っている？私はこの星にはこの都市以外に人間は存在しないと聞いているが？」
　しまった。ここ以外に人間が居ないのは知らなかった。不味いこれじゃあ完全に
　不審者じゃないか
　あの緑狼ってやつかなり余裕を持ってるな。自分にかなりの自信があるのか？
「最近はここまで知能を発達させた妖怪も出てきたのか、それならば早く始末せねば」
　とか言っていきなり殴りかかって来た
「お、おい！ちょっとまて俺は人間だ！」
「お前のような奴が人間な訳あるか！」
　ギリギリ身体を仰け反らせて回避
　何だあの緑の奴
　これはダメだ一度静かにさせないと
「スピードを十倍に！」
　とりあえずヘビの時と同じ様に、しかし、先ほどの様に身体が吹き飛ばない様に、
「腕力を五倍に！」

ぶん殴る!!
パアン！
!?止められた！しかも片手で！そこらの木っ端妖怪とは格が違うみたいだな
いいぜ面白い！俺も都市の警備員位倒せるようにならないと！
「良い威力だ、さっきから十倍、五倍と、もしやお前は力の強さを変えられるのか？」
バレた。まあ、能力がバレても問題は無さそうだが。「～を何倍に！」の
叫びで緑狼に攻撃の威力がバレるのはめんどくさいな
叫び無しで威力って上がらないのかな？
「大正解だあ！」
バレたもんは仕方ないな。ちょっと声無しで威力上がるのか試してみようかな？

緑狼サイド
あ、こいつ強いわ。この男の拳を片手で止めて感じた。腕がミシッていった。
しかも、こいつはいま五倍と言った。
もしやこいつは能力持ちかもしれん。私には能力は無いが部下に何人か能力持ちが
いる。こいつもその類かもしれん。『力の強さを操る能力』と言ったところか。
「良い威力だ、さっきから十倍、五倍と、もしやお前は力の強さを変えられるのか？」
とりあえずカマをかける。能力が分かれば対応しやすいんだが
「大正解だあ！」
と言って突っ込んできた
もしや、あやつはバカなんじゃないか？

レイサイド
やばいな思ったより強い。俺が戦いに慣れて無いとしても普通に都市の近くを守る警備員達はここまで強いのかよ
俺、思ったより弱くね？
とりあえず様子見だ叫び声無しで威力が上がるのか試してみよう
「いいね、面白いよあんた、ここまで強い奴はなかなかいないよ」
「ふん、その言葉、有り難く受け取っておくよ」
こいつ、もしかしたら戦闘狂なんじゃないか？
だとしたらめんどくさい。戦闘が楽しいと思う奴の気持ちは知らんが
永久に戦い続ける気がする
「じゃあ次は私からいくよ」
そんな声と共に目の前に拳を振り上げた緑狼が表れた。
まずい！
レイが緑狼の攻撃がきたと思った瞬間
ドオン！といった音と共にレイが吹き飛んでいく

「あれ？思ったより弱い？」
「な訳あるかあ！」
レイはとっさの判断で防御力を最大まで上げて自身の身を守った
そして、一つ思い付く
『あれ？全てのスピードを最大まで上げればかなりの強さになるんじゃね？』
そしてレイは『動く』スピードを最大にして緑狼の前に現れた
「!?早い！」
そして『攻撃』スピードを上げておもいっきり殴りまくる
さらに『判断』スピードも上げて緑狼の攻撃は避け続ける
「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラァ!!!!」
「嘘!?威力を下げた代わりに攻撃の間隔を狭め、しかも私の攻撃は全

て避けてんの!?」
緑狼がレイの攻撃パターンを突然変え、しかも、自分の思いもよらぬ攻撃を仕掛けたレイに
驚き、少し気が削がれたのがいけなかった
ふと、攻撃が止んだ事に気付きレイの方向を見ると
レイは5メートルほど離れた木を蹴っ飛ばし自分の方へと飛んで来ていた
緑狼は思った　ヘビを粉砕したあの攻撃が来る　と

「おらぁ！」

大きなレイの叫び声と共に
『辺り一帯の木々が吹き飛んだ』

「…うっそぉ」

確かにレイはおもいっきり殴った
ヘビが吹き飛んだ位の勢いで、しかしヘビを殴った時はここまで反動は無かった、
それはヘビがそのまま吹き飛んだから
それでは何故今回はここまで辺り一帯の木々が吹き飛ぶ位の反動が起こったのか
それは
『相手がレイの攻撃を止めたから』

レイのその一撃で何かを確信したのか緑狼は戦う気がなくなったかのように
表情を柔らかくする
その様子を見てレイも安心した様な顔をした

「あんた、強いね。あんた名前はなんだい」
「俺は、レイ、能力持ちの普通の人間だ。改めて言うが都市に危害を加えるつもりはない」
「ふふっ知ってたさ、戦えば解る。あんた…レイだっけ？
　あんたが悪い奴じゃ無いって事ぐらい」
「なら、さっさと戦いをやめて欲しいんだけど」
「済まないな、私と同じ位強い奴と戦った事が最近なかったんだ」
「そうなんだ、緑狼って都市のなかでも強い部類にはいるのか？」

　そう言うと緑狼は珍しい物を見るような顔をして
「あんたいったい何者だい？自分で言うとあれだけど私一人の力だけでこの都市を五百年間守り続けたえーゆーだよ？妖怪なのに人を守る変な奴として妖怪の中でも結構名は知れ渡ってたとおもってるけど」
　と言った。まあ、つい一時間程前にこの世界にきたばっかのレイは知らない情報である
「マジかじゃあかなり強い奴と戦ってたのか!?」
「うん、少なくとも都市の中ではトップレベルの強さだよ」
「ならここまでつよいわけだぁ」

　正直レイは安心していた。
　だって周りにあそこまで強い奴が沢山いたら流石にキツすぎる
「まあ、事情は知らないし聞かないけど都市の中に入れてあげるよ」
「でもいいのか？こんなに怪しい奴を都市の中に入れて」
　少しレイはここの防犯能力に心配した
「普通ならダメだけどレイは悪い奴じゃ無さそうだし大丈夫！それに、何か問題をおこすようなら私より強い人達が全力でレイを殺しに掛かるから」
「デスヨネー」
「まあ、今から都市に案内するよ」
「待って、少し眠らせて」

レイはもう疲れきっていた。実際、神香が決めたルール（今のところ能力は一つしか使えない）
をすり抜けて『全てのスピードを上げる』といった形で『動く』、『攻撃』、『判断』スピードと
同時に３つ、能力を使用したのだから身体には負担も大きい
「まあ、よろしくなレ…イ……？おい大丈夫か？……何だ寝てるだけか」
レイが目を覚ますのはこれから半日後のこと

第四話　都市

「うん？ここは…ああ緑狼って奴と戦ってぶっ倒れたんだっけ？さすがに無理しすぎたな」
　レイは森の大きな木の前で横になっていた。
　さっき戦った所は最後の一撃で木々が吹き飛んだから別の場所だろう
「あ、起きた？」
「ああ、緑狼だっけ？ごめんな、思っていたより疲れてたみたいで」
「いいのいいの気にしないで、私もここまで強い奴と全力でやりあえたのは久しぶりだから」
「じゃあ改めてよろしく。俺は普通の人間、レイだ。都市を目指してそこらをさ迷ってた」
「都市以外に住んでる人間は初めて見たよ。私は『都市警備隊総隊長』の緑狼だよ。このばかでかい都市の周りを一人で守っているよ」
「じゃあ、お互いによろしくな！」
「ああ、で都市を探してるんだっけ」
「そうなんだ、都市まで案内してくれるか？」
「いいよ、あんたが寝てる間に夜も明けたし都市までそう離れてないから」
　今、レイが戦った時とは反対側に太陽がある
「じゃあ、都市に着くまで都市についての説明を軽くしとくよ」
「ＯＫ！じゃあ出発だ」

少年少女移動中……

　レイの目の前には高さ十メートルはあるだろう壁が広がっている。
　恐らくこれは都市の周りを囲っている壁なんだろう。
「さあ、ここがお前の探していた都市だ！」

「すっげー!ここが都市かあー」
壁の一部が門になっていてその門をくぐると一面にこれぞ未来都市といった様な
風景が広がっていた。
百メートル以上はあるビルが幾つも並んでいてその景色が地平線まで続いている
何故ビルに囲まれているのに地平線が分かるのかと聞かれれば簡単だ
横に30メートル位の道路が都市の中心だろう方向に『曲がる事無く真っ直ぐに』
続いているから地平線が見えるという事だ
その道路に沿ってビル群が続いている。
日本等の現代(?)の都市とは比べ物にならない程文明が発達している事が分かる
都市の外側でここまで発達しているなら都市の中心はどれだけ凄い事やら
「そういえば都市に住みたいんだっけ?都市に住むなら…都市に住んでいない人間は
どうなるんだろう?」
「難しいのか?」
「いや、とりあえず都市の中心に行こう。そこで都市のトップに聞いてみよう」
「そういえば、都市の中心まで五十キロ位あるって言ってたけどどうするんだ?ワープでも使えるのか?」
「ワープもあるけど私は非常時以外は走って行くかな」
緑狼いわくワープの方がはやいけどやっぱり生き物は走った方が良いのだとか
「走って行くって住んでる人達に迷惑掛からないのか?」
いくら緑狼が都市でかなりの強さを持っていて、かなりのスピードで走ったとしても
周りの人達に迷惑は掛からないのか?風圧とか衝突事故とか

「ああー大丈夫、大丈夫！地下に私専用の通路があるんだ」
「なにそれ」
「この広い道路の真下、地下百メートルに作ったトンネルで都市の周りの東門、西門、北門、南門の近くにそれぞれ四本、都市の中心、都市管理センターまでの直通通路があるんだよ！
レイならスピードを上げて私位の速さで走れるだろうから、一緒に走って行こうよ！」
「へーじゃあその通路を通って行きますか」
「やった！まさかあの通路を誰かと二人で走るなんて思わなかったよ！」
そんな事を話ながら緑狼専用トンネルの前へたどり着く。見た目は普通のトンネルだ。
「じゃあ、いくよっ！」
「おっしゃあ！」

少年少女移動中……

ここは地下百メートルにある緑狼専用トンネル、いつもは緑狼一人が走っているのだが
今日は違う。緑狼とレイの二人がトンネルを走っていた
「おっそいよー」
「ばっかやろー！これでもスピード最高なんだぜ！」
「もうそろそろ着くからそろそろ止めてねー」
「はいよー」

レイと緑狼はエレベーターの前へたどり着いた
緑狼はエレベーターの横にあるインターホンに話しかけた
「あーあー聞こえる？」
『ええ聞こえるわ。今回はかなりの時間がかかったのね』

「まあまあ、じゃあ上げてくれる？」
『だめよ、まずはあなたの後ろにいる人間について説明しなさい』
　緑狼の後ろにいるレイについての質問が来た、因みに都市の門の時は緑狼の一言「大丈夫、私が許可したので問題ありません」の一言で通された
「えー」
『えーじゃありません！子供が猫を家に連れて家に帰ってくるのとは訳が違うんです！』
　レイは
（そういえばここはもう、都市の中心部で都市の外から来た人間が軽く入る事は難しいよな）
　と、レイは思っていた
「わかったよ、この人は都市の外で生まれた人間で…『はあ!?何言ってるの！都市の外に人間は存在しないのよ！』」
「ええでも、この人から感じる力は霊力そのものだよ」
『そうなの？……じゃあとりあえず私がそこに行くわ、あなたの連れて来た人間がこの都市管理センターの中に
　穢れを持ち込む可能性があるのよ』
「はーい」
『じゃあそこで待ってて、今からそこに向かうから』

　そんな会話を聞いた。確かに緑狼は人を信じ過ぎるかもしれないと、レイは思った
　そしてエレベーターの到着するチーンという音がして中から人が出てきた。
「あ、着いたのね永琳「今はそんなのいいから早く上がって！そこの君？例の人間は？
　貴方も早くこれに乗って」」
「ちょっとちょっとどうしたのよさっきと全然態度が違うじゃん」
　しかし永琳と呼ばれた人間は緑狼を無視してレイに話しかける
「貴方が外から来た人間ね、初めまして私は八意　ＸＸ　言いずら

いなら永琳でいいわ」
「あ、はい、初めまして。でも、何故こんなに急いでるんですか？」
「貴方に会いたいって人がいるのよ。しかもこの世界で一番位の高いお方がね。」
　そこに緑狼が口を挟む
「それってまさか」
「そう、ツクヨミ様よ。確かにあなたが連れて来た人は人間よ。確かに都市以外に人間が存在しないのも確か、
　私がこの星をスキャンして調べたのだから」
（この星をスキャンしてってこの時代の科学力はどうなってるんだよ）
「でも、それだけならツクヨミ様は動かないわ『そうか、この件は八意永琳に任せる』とだけ言うはずだわ」
「そうよね、十年位前にこの都市の指揮権は永琳に譲るって言ってたよね」
「だからおかしいのよ」
（ついて行けない）
　やがてチーンという音がしてエレベーターが止まった。
　するとすぐに緑狼が
「あなたらしくない、ツクヨミ様の所に行くならカードをそこに入れなきゃ」
「あ、ああそうね」
　と言いエレベーターの階数が書いてあるボタンの横にスイッチを差し込むと
　エレベーターのドアが開く事なく、またエレベーターが動き出した
「今のは？」
「今のはさっき話してたツクヨミ様の所へ普通の人間が入らない様に
　ツクヨミ様のいる階層だけこのカードで入れる様になっているのよ」
　と、永琳が教えてくれた
　やがてエレベーターが音もせず止まりドアが開く

そして、永琳と緑狼の二人が緊張した顔で歩き出す
それにつられてレイも緊張した顔になった
「ツクヨミ様、外の人間を連れて来ました」
「は、はい都市の外に居たレイです」
レイの前にはツクヨミと呼ばれた人間が座っていた
見た目は大人の女性といった感じでかなりの威圧感がある
「まあ、そう緊張するな、お前がどこから来たのかなど、知りたいなど思わん」
「え？ならなぜこの人間を連れて来たのですか？」
と永琳が聞く
「永琳、心配するな、こいつは普通の人間だ、それと済まないが永琳はこの部屋の外で待っててくれるか？」
「はい」
永琳はすぐに外に出ていった
「さて、緑狼はここにいてほしい」
「はい、分かりました」
今、緑狼とレイは隣同士で立っていて、その前にツクヨミが立っている
「さて、レイと言ったか聞きたいのはお主は何者なのかということだ」
「え？」
レイがそう言った瞬間に
『レイの上半身が吹き飛んだ』
「嘘…レイ！」
緑狼の叫び声がツクヨミの部屋に響く

第五話　ツクヨミ様

緑狼サイド
私はこの都市が大好きだ
都市の人達が大好きだ
だから都市を守る為に危険地帯の都市の外側を一人で守っている
私一人では広い都市の周りを守るのは無理だと思うが
そもそもツクヨミ様の守護で都市に近寄る妖怪が少ない
多く来たとしても日に二体ほど、さほど辛い訳ではないし
相手も強くない、だから一人で都市を守るのが辛い訳ではない
しかし相手が弱いといっても警備隊の人間では
歯が立たない、だから都市の外には警備隊の人間はつれていけない
しかし、最近の妖怪達は力を持ってきた、だんだん都市に近寄る妖怪も増えてきた
自分一人で都市を守るのも辛くなってきた。いい加減都市の外側を守る人間を選んだ方が良いのかも知れない
今、都市の人間で飛び抜けて強い能力持ちの人間はいるのだが、
まだ、妖怪と戦えるかも分からない

そんなとき現れた不思議な人間『レイ』
かなりの強さを持ち、その強さは私に匹敵するほど、しかもレイはこの都市に
友好的な態度をしている
この人間ならこの都市を守る事ができるかも知れない！
しかも、この実力なら私の組手に付き合えるかもしれない
そう思ってきた
しかし、そのレイはいま自分の目の前で、ツクヨミ様の一撃で、
死んでしまった
「嘘…レイ！」

「ツクヨミ様！何故レイを殺したのですか！」
緑狼は気づいていた、今ツクヨミが光弾を飛ばしたことに
あの技はツクヨミの神力を集めて撃つ、霊力等を扱える者なら比較的簡単に使える技。
それをかなりの速さでレイにぶつけたのはわかる
しかしぶつけた、いや殺した理由が解らない
そう思いツクヨミに何故殺したのかを聞いたのだ
「何を言っておる？あやつは普通の人間ではない」
「何を言ってるんですか！」
ボゴ
そのとたん何かが沸騰するような音がした
勿論何かを料理している訳ではない
その音は先ほどツクヨミが吹き飛ばしたレイの死体からしていた
死体は上半身が吹き飛んで肉片があちこちに散らばっている
下半身は形を残して倒れているがその断面から音がしている事が二人にはわかった
「え…何これ」
「やはり、こいつが」
そして、その断面から肉がぼこぼこと溢れ出てきて、その肉が人の形を作っていく
そして、レイの体は元の姿に戻っていた
「あー痛たかった、なにすんだよ！」
「レイ！死んだかと思った！」
「ふむ、レイとやら」
「何だ、あ！何ですか？」
「ふん、無理に敬語など使わんでもよい。後ろのそれに心当たりはあるか？」
「？何で…うわ！何これ！グロ！」
後ろには先ほどのレイの上半身だったものが散らばっている
「ふむ、心当たりはないか」

「いや、何となく分かる…俺か」
「そうだ。おまえは私が一度殺した。しかし、お主はいきている」
「まあ、そうなるな」
「お前はもしかして「不老不死、老いることも死ぬこともない存在、魂の輪廻から外れた存在ともいえるな」…そうか」
　レイは正直に言った、言い訳を考えるのが面倒だったと言えばそうなんだが
　ツクヨミはレイが普通の気付いているだろう
　じゃなきゃ自分から正体をあかしたりしない。いつの時代でも不老不死は異常だと思うから
「そうか、やはりな」
「え、え、なになに?どうゆうこと?」
　一人だけついていけてない緑狼が聞く
　それに答えたのはツクヨミだった。
「このレイは普通の人間ではない」
「しかしツクヨミ様、レイは霊力を持っています。彼は人間です!」
「確かに人間だ。しかしこいつは、自分で言った通り不老不死、老いることも死ぬこともない存在。普通の人間とは言えないのだ」
「え?」
「詰まり、俺は殺しても、殺しても、何度でも蘇ってくるバケモンだってことだ」
「まあ、私が全力で魂ごと消滅させれば死ぬと思うがな」
「え!まじ!?」
(おい、どうゆうことだ神サマよー聞いてねーぞ!)
　レイはそんなことを考えているが実際、殺される様な事はするつもりは無いので何の問題もない
「と言うことでレイの正体が知れたから私は十分何だが、何のために都市の中心まで来たのだ?」
「え?なら何故にレイを?」
「ただ、緑狼が連れてきたレイが普通の人間とは桁違いな程の魂と体の繋がりを感じて気になっただけだ」

「そうなのか、俺は都市の近くに現れた「現れた？どうゆうことだ？」
……言葉の通りそこにふと現れた」
「何を言っているのだ？」
「俺も何を言っているのか分からねえ。ただ、確かに今から二時間程前に現れた、
それまではこの世界に存在していなかったことは確かだ」
「はあ、とことんお主は不思議な人間だな」
「と言うことで今、俺の家はない。住む場所を探しているのだが」
「そういうことか……しかし、お前には色々と分からない事が多すぎる！監視
ということで緑狼の家に住んで貰う事になる」
「え、ちょっとツクヨミさまぁ!?ななななに言ってるんですかあああああ!!」
緑狼は顔を真っ赤にして手をブンブン振っている
いくら警備隊総隊長だと言っても（見た目）同じ位の異性との暮らしには
恥ずかしい物がある
「何を言っておる？先ほどレイが死んだ時、この私に怒鳴ってきたではないか」
「いや、確かにあのときはかなりのショックだったのでぇ！そっそれに！レイだって」
「あ一、一人暮らししたかったけどしゃーないか」
「レイイイイイイイ!?」
ちなみにレイはノリでは無く本気でそう思っている
ツクヨミはニヤニヤしている
「もしかして緑狼は男と暮らすの嫌だったり？する？」
（てか普通は嫌がるもんか）
「ういぇ!?、嫌じゃないけど……その…ね」
「で、どうなのか？今、お主の家は空いてる部屋は在るのか」
「は、はい「なければ新しい家を支給するが」あ、じゃあ新しい家が欲しいです」

（今、家汚ないんだよなあ、なら新しい家を貰って誤魔化そうかなあ）
　なかなかのぶっ飛び理論である
「ということでレイと緑狼は一緒に住む事に問題はないか」
「俺は特に問題はないかな」
「あ、もう、特になしです」
（諦めよう、レイだって嫌じゃなさそうだし）
「明日からは、永琳、先ほど私が追い出した奴に聞け、多分明日から警備隊副隊長にでもなるのだろう」
「いきなり副隊長か」
「緑狼と互角に戦える奴が何をいっている」
　緑狼と互角に戦えるレイを警備隊員にしないのはもったいないからとのこと
「そういえばなんで永琳を追い出したんだ？」
「彼女は最近不老不死の研究をしていてだな」
「あー、研究材料にされるかー」
「そういうことだ」
　永琳は研究熱心で、自分の研究の為なら少しの犠牲なら特に何とも思わないのが
　難点である。
　と、言っても血を抜いたり皮膚を少し貰ったりするていどだが。
「後は不老不死は実際、実現不可能だからレイの存在で変に
　希望を持って欲しくないのもある」
「結構優しいんだな」
「部下に優しくなければこんなに大きな組織のリーダーは出来んよ」
（でも実現するのが永琳なんだよなあ。原作だと不老不死だし）
「まあ、ここでの話は終わりだ。住む所は私が決めるが、後は永琳の指示に従ってくれ」
「「はいっ！」」
　こうしてツクヨミの働きで都市管理センターのツクヨミのいる階の一つ下の５８階のフロアすべてが
　緑狼とレイの家になった訳だが

「じゃあこれから当分お世話になると思うんでこれからもよろしくね」

「ああ、よろしくだな」

第六話　明日に備えて

ツクヨミの部屋から出て、外で待っていた永琳に連れて行かれたのはツクヨミの居た階の一つ下の階
１５８階に案内された
「ここは？」
「あなたと緑狼の家よ。ツクヨミ様に頼まれたから探したけどここくらいしか空いてなかったのよ」
「仕事が速いな」
「じゃあ明日からあなたは警備隊員として働く事になるから明日は朝６時に
第３格技場まできて」
「それって何処にあるの？」
「この建物の八階よ詳しくは緑狼に聞けば分かるわ」
と言って永琳は去って行った。永琳はあの赤青の服の上に白衣を羽織っている
髪は肩位の長さ。
「さてと新しい家が決まった訳だけど…どうする？」
「とりあえずこの中を見て回ろうかな」
と言って緑狼は家の中に入って行く
「どれどれ、わぁ広い！」
家の中はかなりの広さがあり二、三十人は入れる程の広さになっていた
「わーこれは凄いな」
窓から都市が一望できる。
「ここは都市の中で一番高い建物だからねえ。都市の端っこまで見れるよ」
確かにいきなりビル群が無くなり森になっている
「じゃあ私の家から荷物を持ってくるね」
「あ、じゃあ手伝おっか？」

「あ、じゃあお願いね」

少年少女移動中…

都市に入って来た時は朝だったのにもう暗くなってきた
レイがこの世界に来てからもう1日経った事になる

緑狼サイド

あー！やっちゃったどうしよう！家の中が汚ないから引っ越したのにそこにレイを連れてったら
意味無いじゃん！どうすんのよー
「あ、ああここが私の家なんだけど荷物とかまとめて来るからちょっとここで待ってて！」
「あ、うん」
（そうだよな女の子の家に入るのはちょっと不味いかな？）
（よし！これで家の中が汚ないのがバレない！）
「さて、とまずは服からかな」
ガツン！
不味い！足が棚に引っ掛かった！
ガッシャーン！

レイサイド

やっぱり一億年前だから星空も全然違うなと思っていたら
ガッシャーン！
何か家の外で緑狼を待ってたら何かをぶちまける音がした
「おーい大丈夫かー」

返事はない。ただの異常事態の様だ
「なんだなんだ?・緑狼はどじっ子なのか?」
緑狼の安全を確認するために緑狼の家の中に入って行く
「おーい!・大丈夫かー…うおっ!」
目の前には棚が倒れている。その下には本等がぶちまけてありそこに緑狼が下敷きになっている
何があったんだよ
「よいしょっと、大丈夫かー?」
棚を元あったのであろう位置に戻して緑狼を引きずり出す
「見られた」
「?」
「私の部屋が汚ないのがバレたっ!」
「!?」
なんだなんだと思い周りを見渡すと…これは汚ない、前世の俺の部屋位ある
「なんだ?・こんなになるまで探し物でもしてたのか?」
「!?そ、そうだよ!・いやあ!探し物をしてたらコケちゃってねえ!」
「そうか…じゃあ一緒に探そうか?」
「い!・いや、もう見つかったから良いよ!・ささ!・帰ろう!」
と言って服が入った紙袋を見せてきた
まさか緑狼が部屋を片付けない人だったとは
咄嗟の判断で探し物のせいだと勘違いした振りをしたのが良かったのか?
まあ、いいか

緑狼サイド

あっぶなー!・いや、レイが勘違いしたのが良かったな
そういえばレイと戦った時も私がレイの能力を当てた時も
『その通りだ!・』

とか言って突っ込んで来たっけ　（第３話？参照）
レイってバカ何じゃないか？

「じゃあ今から私の引っ越し祝いとレイの都市生活初日のパーティーをしたいので何処か開いてる店に行きます！」
「おー！」
ってことで近くの商店街に行こうかな

少年少女移動中…

レイと緑狼が商店街に着くとそこは多くの人が夕飯の買い出しで賑わっていた
いいなあ…前世だと全部スーパーで済ましたからなあ、こんな雰囲気は初めてだな
「おー緑狼ちゃんじゃないか！」
「あ、八百屋のおじさん！今日のおすすめの野菜はある？」
「うちは良い魚が入ったよ！」
「あ、魚屋のおばちゃん、野菜買ったらいくね！」
わいわいガヤガヤ
凄いなやっぱり都市を守っているから緑狼は人気者だなあ
五百年前からこの都市の警備隊隊長をしてるんだっけ

「お？そこのにーちゃんは緑狼ちゃんの彼氏かい？」
「お？そう見える？」
「そんなんじゃないよ！レイも悪のりしなくていいから！」
緑狼は顔を赤くして否定している
緑狼はこう言ったからかいには弱いのか
買い物を済ました緑狼は新しい家がある都市管理センターの方へ歩いていく

「あー楽しかった！じゃあさっさと家に帰るよ」
「はいよー」

少年少女移動中…

「「ただいまー」」
「おし、じゃあ軽く二人で食べられる量で鍋でも作ろっか」
「いいねえ！」
そう言って台所のある方へ歩いていく
「手伝うよー」
「ありがと、じゃそこの野菜切っちゃって「どの位？」適当」
「て…適当「じゃない！五センチ位！」…はい」
おいおいズボラさが出てるぞ
（あっぶなー）

…完成！

…完食！
「「ごちそうさまでした！」」
いやーおいしかった
やっぱり自分達で作った料理は美味しいな
「じゃあ私はお皿とか洗ってるからレイは休んでていいよ」
「はーい」

ジリリリリリ！
「!?こんな時に！」
突然警報の様な音がして緑狼が焦った様な顔をした
「都市の近くに妖怪が来てる！」
「え、マジか」
そう言って窓から外を見てみる

うーんここからじゃ分かんないか
「まあ、緑狼とレイよ今日くらいゆっくり休め」
「おお!?」
「ツクヨミ様!」
目の前にツクヨミが浮いていた
いきなり出てくんなよ心臓に悪い
「今回は私が片付けておく」
と言ってツクヨミが空高くへと飛んで行き

都市の外側に向かって
ビームが発射された

「!?」
「わー、ひっさしぶりに見たな」
ツクヨミから放たれた光線は真っ直ぐ進んでいき
都市から近い森の中に着弾した
「まあ、こんなもんか。じゃあ明日、レイは第3格技場に来る様に永琳が言ってたぞ」
「ああ、聞いた」
「そうか、なら構わない」
そう言ってツクヨミは消えて行った
恐らく自分の部屋に戻ったのだろう
「ツクヨミ様にあそこまで言われたらゆっくり休みますかね」
「そうだな」
じゃあゆっくり休んで明日に備えますか

夜は更けていく

第7話　レイ、出勤？

「レイー起きろ～」
　うん？…ああ、昨日から緑狼と都市で生活を始めたんだっけ
「あ、緑狼か、どうした？」
「朝ごはん作ったから一緒に食べよ」
「あーはい…痛っ」
　緑狼は家から布団を持ってきたから良いもの、俺はそんなものないだからといって地べたで寝たのはまずいな、体の節々が痛い
　再生力を上げて高速で回復させる
「「いただきます！」」
　今日は普通の和食、白米に味噌汁、焼鮭と漬物
　美味しいです
「この、漬物永琳が漬けたんだって」
「お、そーなのか？」
　永琳の漬物か、永琳…原作キャラで薬を作る能力だっけ？
　この世界で初めて会った原作キャラだな
「あ、あの昨日ここまで案内してくれた赤青に白衣している人だよ」
　緑狼が教えてくれる
「あの人はどんな人なの？」
「永琳は天才の科学者でこの都市の発展はほとんどが永琳のお陰なんだよ」
「へー例えば？」
「あの昨日少し話したワープ装置とか作ったのが永琳だよ」
　マジかよおっそろしいな
「一回対妖怪様の兵器の実験に立ち会ったけどあれは凄かったよ」
　緑狼によると外の妖怪に新兵器を試すから護衛として付いていた時の事らしい
　現れた妖怪の群に新兵器を撃った所、永琳の目の前にいた妖怪だけが消し飛んでいたらしい
「私は後ろに居たから良かったけど、あんな武器私も消し飛ぶからね。

そのあとあれはこの世界のバランスを崩し兼ねないってことで
ツクヨミ様が封印したんだよ」
そりゃ大変だな
「でも、この漬物とか家庭的な事もできてすごいんだよ」
「へー、で緑狼もかなり家庭的だと思うよこの鮭とか味噌汁とか」
「へ？…そ、そう？人に振る舞った事が無いから…おいしい？」
「うん、美味しいよ」
少なくとも俺の料理よりは
「そ…そう？……ほ、ほら！朝ごはん食べたなら行くよ！第３格技場でしょ！」
「あ、ちょっと待って！」
「いってきます！」

少年少女移動中……

第３格技場
学校の体育館くらいの広さの空間に１５０人ほどの筋肉質の男が集まっている
たけし「なんか今日、西地区警備に新しい隊員が来るらしいぞ」
まきお「マジかよ！俺らの所じゃん！可愛い娘が良いなあ」
のぼる「バカ言えこんなに暑苦しい所に女の子なんかくるか」
たけし「緑狼さんも女の子だろ…」

ワイワイ　ガヤガヤ

「おい！緑狼さんが来たぞ」
ガヤガ…ピタ

「では、朝の報告会を始める。昨日の都市警備で何か異常があった地区はあるか？」

シーン
その他報告など
「では、最後に今後都市の外を警備する人間を選出をしようと思っている。詳しくは各区画の隊長に聞いてくれ」
ざわつくのも無理はないこの都市が作られてから５００年程都市を守り続けたのは緑狼ただ一人!?!?
つまり都市の人間達は緑狼以外の妖怪を見た事がない。
都市の人間達の都市の外側への印象は、
『都市の人間では敵わない、緑狼みたいな強さの奴等がたくさん居る世界』だといった印象だ
そんな都市の外側に人間を向かわせると言った緑狼に驚きの目をむける
『都市でトップレベルの強さを持つ緑狼しか戦えないような相手に自分達では
一方的に殺されるだけではないか』
といった恐怖の空気が格技場を包む
ただ、一ヶ所を除いて。
『きた!これでもっと強い奴と喧嘩できる!』『外の妖怪どもは俺が蹴散らしてやる!』『まさか緑狼総隊長が外に行ける許可をしてくれるとは!』『もっと強い奴と戦いたいぜ!』『中の仕事に飽きてたんだぜ!』
この異様な戦闘に対する執着を持っているのは西地区警備隊員達、
何故か戦闘好きな奴等がたくさん居る
しかし、性格が悪い訳ではない。それどころか都市民にはとても愛されている。
その訳は警備態度にある。
通常、三十人ほど居る警備隊の中で１５．１５人ずつ分けて朝、昼と警備するが、
西地区警備隊員は違う。

寝る間を惜しんで、悪い奴等（戦う相手）を探して都市中をさまよって居るため、
悪いことをしようとするやつはほとんど居ない。
そんな西地区の人間だけが盛り上がっていた。
「じゃあ今日の報告会を終わる。西地区の人間以外は解散だ」

数分後
かなりの広さに３０人ほどの人間が座っている
たけし（そういえば緑狼総隊長って本当はかなり明るい人だって聞いたぞ）コソコソ
まきお（マジかよ！あんなにクールなのにか？）コソコソ
のぼる（仲のいい人にはかなりフランクだって聞いたな）コソコソ
たけし（うちの隊長とか八意博士とは仲良いよな）
隣「おい、静かにしろ！」
（（サーセン））
コイツらも西地区警備である
「よし、では話を聞いた人はいると思うが今日から新しい隊員を配置する」
そこに他の人達よりも一回り大きい２ｍはありそうなガタイの良い男が話かける
「なぜに唐突にそんな事、俺は聞いてねえよ」
彼はこの西地区警備隊の隊長『御霊　雷（ミタマ　ライ）』
この都市警備隊の中でも一番戦闘好きな西地区警備隊員達をまとめる強者だ
「すまない、今回は私と八意博士が勝手に決めさせてもらった」
そんな自分の２倍はある人間相手に動じる事なく緑狼は話続ける
たけし（おいおい、この都市トップ２のお墨付きって）
まきお（可愛い娘が良いなあ）
のぼる（どんな人なんだよ）
レイ（残念ながら男なんだよねえ）
まきお（そっか残念だな）

（（こいつ誰？））
「そうですか、すみません。では紹介してくれますか」
ガタイの良い男が納得したように返事をする
その様子を見て緑狼は
「ああ、そのつもりだ、レイ入って来てくれ」

ザワザワ

「もう居ます」
と言って
座っている人の中から立ち上がる
扉の方を見ていた緑狼は固まる
レイはそんな緑狼を放っておき勝手に喋りだす
「ここの西地区警備隊に入りました。名前はレイですよろしくお願いします」
と、一言だけ言った
「何故、あの扉から来なかった？」
と緑狼がレイの方を向いてきく
「ちゃんとあそこから入りましたよ」
「いつ？」
「15分ほど前」
ブッハ
小さく笑う声が聞こえる
「はあ、まあいい、それでレイは先ほど話した都市外の警備に回って貰う」
ザワザワ！
すると先ほどのガタイの良い男が
「ちょっと緑狼ちゃん、新人にそんなに危ない所任せるのか？」
「御霊（ミタマ）、せめて集合の時くらい敬語で話してくれない？」
たけし（御霊隊長の通りだぜ）
まきお（緑狼総隊長のため口キターー）

のぼる（やっぱり御霊隊長、緑狼総隊長にちゃん付け直さないのかな）
「大丈夫だ、御霊も都市外周警備に行ってもらう、もう、妖怪との戦闘も大丈夫だろう」
「マジで！俺、緑狼ちゃんと同じ位強いってこと？」
「バカ言え、いくらお前でも命懸けの戦いになるぞ。この話はおしまいだ。
レイと御霊はこのあと残るように」
と、緑狼が言う

「では、解散！何時もの持ち場に行くように」
と御霊が言うと皆バラバラに別れて行く
『なんだよー俺らは外側に行けないのかよー』
と言った声が小さく聞こえる

全員が居なくなった所で緑狼が口を開く
「皆の前では敬語で話して欲しいと頼んだはずだけど」
それに御霊が答える。どうやら二人は仲が良いようだ
「それはゴメンねえ、そんな事より本当に外にこいつを連れて行くのか？」
ヒョロヒョロだし
「残念ながらこれでもかなり強いんだけどねえ」
と、レイが反応する
それを見ていた緑狼は
「はいはい、いいから外側行くよ」

警備隊移動中…

「ここは？」
人が五人程入れそうなドームを目の前にレイが呟く
それを聞いた御霊が不思議そうにきく

「お？レイだっけ？これすら知らないのか？」
「まあ、生い立ちが異常なもんで」
　それを聞いて御霊は何かを察し話を止める
「これは高速転送装置。体を分子レベルまで分解して専用のパイプを通して目的地まで
　転送させる」
「へー相変わらずここの科学力は異常だな」
「ちなみに、こっから都市外門まで一分位で着く」
「はやっ！」
　時速３０００キロってとこか昨日は三十分かかったのに
「ちなみにこれが設置してから人口が少し減ったのは関係ないぞ！」
「バカな事言わない！」
「!?」
　レイは普通に怯えている
「お、焦るな！冗談だぞ！」
　焦って御霊が訂正した。本当に冗談である
「あ、ああ」
　しかし、レイは全く別の心配をしていた
「まあ、早く都市の外側に行くぞ！」
「れ、レイ！心配するな！大丈夫だ」
　御霊は相変わらず焦っている
「早く行くぞ」
　緑狼が行き先を指定してスイッチを押す

……

　ここは都市の端、都市外門の近く
「ほら、着いたぜ！だから心配するな！」

「なあ、緑狼」
「何？レイ」
「別れた」
　レイの意味不明な言葉に首を傾げる
「体が分裂した」
「はあ!?」
　説明すると体を分子レベルまで分解した時、自分の回復力が高いせいで送られた体、回復した体で別れてしまった
「今すぐそっちに行くから昨日のトンネルにこの体をおいといてくれ」
「…わかった」
　そう言ってレイは倒れてしまう
「お、おい！大丈夫か？」
　慌てて御霊が駆け寄るがレイの返事はない
「突然レイはどうしたんだ？」
「わからない、しかし、行くところがある」
　その言葉を聞いて御霊は驚いてそんな事より永淋の所へ連れて行ったほうが良いんじゃないかと
　御霊は聞くが
「それより、まず私とレイ、専用のトンネルまで行く」
「？」
　緑狼と御霊はいつの間にか『緑狼とレイ専用』になったトンネルへ向かって走っていく

第８話　レイの能力の異常性

少し前…
御霊が何かを操作して高速転送装置が作動する
部屋が強い光に包まれる中レイは何かが剥がれるような感覚がした
光が消えると『皆いなくなっていた』
「おろ？・緑狼ー？・御霊ー？・居ないのか？・」
転送ドームから出ると外の景色は何も変わって居ない
つまり移動していないということ
「あれ？……まさか!?」

レイは一つの考えにたどり着いた
皆はいない…自分は動いていない…何かが剥がれるような感覚…
「その考えが正しいなら！」
能力を最大限使って自分の一部を探す。これは昨日の夜に気づいたのだが
自分から離れた肉体にも意識を移せる事が出来る
それで昨日の夜ツクヨミの部屋に残っていた自分の肉片に意識を移してツクヨミの部屋を探検したのだ。案の定見つかったツクヨミに焼かれたのだが
「あった！・」
距離は遠い、しかも異常なスピードで移動している。おそらくまだ、瞬間移動装置向こうの中で移動しているのだろう
「うおっし！・今だ！・」
レイの体はゆっくりと倒れていく感覚がする、しかし気づくと緑狼と御霊に挟まれて立っている
「ほら、着いたぜ！・だから心配するな！・」
御霊がそんな事を言ってきた。結構いいやつだな
「なあ、緑狼」
「何？・レイ」

唐突に話掛けられたからか少し驚いたような声がでてる

「別れた」
といった物のこれだけでは何も伝わらない事に気付きいい加える
「体が分裂した」

「はあ!?」
少し間を置いて最もな反応をする。誰でも突然『体が分裂した』何て言われたら
そんな反応をする
俺だってする。しかし、急いで体を一つに戻さないと何があるか分からない

何でそんな事になってんのよ!と、言ってる緑狼に適当にそれっぽい説明する（前回参照）
「今すぐそっちに行くから昨日のトンネルにこの体をおいといてくれ」
昨日のトンネルを走ってもう一つの体と合体するつもりだ。昨日は緑狼と軽く走って30分だから
全力で走ればもう少し速く着けるだろう

「…わかった」
緑狼の返事を聞いてもう一つの体に意識を移す

「大丈夫ですか♪」
誰かに肩を叩かれたので目を開ける。そして目の前にはメガネを掛けた男が立っている。
誰だこいつ
「何だ?お前」

目の前に立っている男はニコニコ笑いながら『壁に寄りかかった人

が居たから近づいて話しかけたんだよ♪』と
答えた。不思議な奴だな
「済まないが急いでるんだ」
そう言ってそさくさと立ち去る
多分警備隊員だろう、後で緑狼に聞いてみよう
そう考えてレイはトンネルの入り口がある都市管理センターに走って行く

「へえ、さっきまで『心臓が止まってた』のにそこまで速く動くんだ…♪」
男はニコニコ笑いながらレイの入って行った都市管理センターを見ていた

緑狼サイド
あーもーなんだよー唐突にぶっ倒れちゃって！レイの奴！何で分裂なんかするんだよー！
ここまでおんぶしながら運ぶ羽目になったじゃない！
まあ、でも、レイ、良い匂いしたな……じゃなくて!!!
何なんだよぉ最近、と言うか昨日から何か変だよぉ…
永淋に聞いてみようかな…

「あの、緑狼ちゃん？」
「違う！今はそんなに事をしてる場合じゃない！」
「!?」
唐突に叫んだ緑狼に御霊は驚いて固まる

「あ、聞こえた？」
「うん、叫んでた『違う！今はそんな事をしてる場合じゃない！』って」

「リピートしなくていい！」

御霊は思っていた事を聞く

「そういえば何でレイをこんなとこに寝かしたんだ？」

「え、ああレイにそう頼まれてね」

「え？レイぶっ倒れてんだよね」

「そうなんだけどね、私にも良く分からないんだよ」

ああ、レイ速く起きないかなあ、説明が面倒だよっ…!?…

何か来る！

緑狼は何かがすごい速さでこっちに近づいて来るのを感じた

レイ！…違うそれだけじゃない！あのバカ!!

「雷!!（御霊の名）速く逃げて！」

「え？「速く！雷なら死ねる！」お、おう！わかった！」

御霊は何か良く分からないままトンネルから出ていった

その直後

「やっほ！やっと着いたぜ！「バカ！あんな速さで来たら…」ういぇ？」

ドン!!!

レイの到着に遅れてトンネル内に爆発音が響く、

幸いトンネル内に損傷は無いようで音だけで済んだようだ

といっても衝撃があったらしく緑狼の服は少し汚れていて、レイは

『半身が吹き飛んで』いた

「うおおおおお!!いっってええええ!!!」

「れ、レイいいいい!!!!大丈夫!?」

緑狼は急いでレイに駆け寄る。

「あああああああ!!…あ、あぁーー→……」

レイは何か良く解らない声をあげて黙る

「大丈夫!?」

「うん、回復力を最高まで上げたからあと5分もすれば完全に戻ると思う」
　そんな、何でもない様な返事をするレイに向かって
「はあ、本当に心配したんだからね！いくら不老不死でも目の前でレイに死なれたら困るんだからね！」
　緑狼は涙目になりながらレイに言った
（なんか、すっごいなつかれた気がする、あっそうだ）

「緑狼、ちょっと離れてくれ」
「あ、ごめん。近すぎた」
　緑狼は慌てた様にレイから離れた。そしてレイは『元々ここに置いてあった分裂した片方』の方へ
　先に回復させた足で歩いていく
「やはり、意識は無いか。魂は分裂しないみたいだな」
　ここに置いてあったレイの片方の体は意識が無く、心臓も止まっているようだ
「レイ、どうしたの？」
　と言って緑狼も近寄ってくる
「ああ、これはレイに言われた様に置いといたんだけど…」
「うん、ありがと」
　レイはそう言って意識が無い方の体の腹に『自分の指を刺した』
　指が刺さった所からは血が滲んでいて完全に腹の奥に指が入っているのが分かる
「多分、これをこうして…」
　驚愕する緑狼を横目にレイは指をこねくりまわしている
「ちょっとレイ、自分の体？に何してるの？「あった！」!?」
　と言うと共に倒れた方の体がレイに吸い込まれていった
「おし、これでオッケー」
「ちょっとレイ、どうゆうことか説明してくれない？」
　レイの説明によると『元々自分の体だから取り込む事も出来るんじゃ無いか』と思い、適当にやったらできたらしい

「はあ、レイの能力って筋力を操るだけじゃないのね」
「己の体を操る能力だからな、やろうと思えばさっきの体を遠隔操作も出来るとおもうぞ」
「やっぱりむちゃくちゃじゃない。自分の体が関わるなら何でもありってことじゃない」
（そう考えるとやっぱり俺のチートさがわかるな）

レイがそんな事を考えているうちに一度地上に上がった御霊が戻ってきた
「なんか外が野次馬で凄い事に……ここは何も問題はないみたいだな」
「あ、御霊やっほ」
「お、レイ起きたのか、どうしたんだ？いきなりぶっ倒れて」
御霊はレイが分裂した事を知らないので、『ぶっ倒れてトンネルに行って起きた』と思っている
「ああ、何でもないよ（能力持ちって知られるとめんどくさいし）」
「じゃあ今度こそ都市の外に行くぞ」
「「はーい！」」

御霊とレイの返事を聞いた緑狼はトンネルの出口へ歩いていく

第9話　レイ、初の対人戦

緑狼とレイ、雷の三人はトンネルから出て都市の入り口の門まで来た
レイが高速で走ってきたせいで起きた衝撃波は外にも大きな被害は無かったようだで
大きな音による野次馬が集まってきた程度ですんだ
そして森の中を緑狼の先導に従って三人黙って歩いていく。
先に声を出したのは雷だ
「うっわーすげえ都市の外側なんて初めて来たぜー！なあ！レイ！」
「うん？あ、ああ、まあね」
レイの曖昧な返事に雷は疑問を感じる
「何だ、レイお前都市の外に来たことあるのか？」
「え、ああ、うん」
レイは都市の外側から来たことを黙っていたかった。存在するはずのない都市の外の人間
それで周りから人が居なくなるのが嫌だった
そんな事を考えていると緑狼が立ち止まり
「御霊に聞きたい事がある」
「何をだ？」
緑狼が雷を御霊と呼ぶのは仕事モードの時だけだ。
雷も気持ちを切り替える
「レイを都市の外側の警備、『都市外周警備隊』に入れる事を御霊は納得してくれるか」
「いや、納得出来ない。それに緑狼総隊長も言ってたでしょう、
俺でも命懸けの戦闘になるって」
ここの妖怪はそれほど強いならレイなら直ぐに殺される、そう雷は思っていた
新しい隊員に早速死んで欲しくなかった
「なら、レイと御霊で組手をしてもらう」

「はあ!?何を言ってるんだ?」
「レイとの組手で御霊がレイの実力を知って貰えば納得してくれると思ってな」
「はあ、そういうことか緑狼ちゃん、あんたそれっぽい理由つけてレイが戦ってるの見たいだけじゃねえの」
　雷は気づいていた。緑狼の仕事モードの顔に期待の表情が見えていたのを、
「ふふん、バレちゃったか♪でもそれなら雷も納得してくれるでしょ」
「まあ、ここまで緑狼が戦わせようとしてくるんだから、実力はあると思うしな」
　雷も嫌がる必要がない、隊員の中にも自分と同じ位強い奴はいるが人数が少ない。もし、そいつと同じ位なら…
「戦ってやろうじゃねえか!」
「決まりだな、レイもいいか?」
「ああ、(能力無しで自分の実力がどれ程か知りたかったし)」
「(そう、無理はしないでね)」
　小声で緑狼と話してから
「で、何処で戦うんだ?森の中だから手加減はしなくてもよさそうだが」
　すると緑狼が
「ここだよ、周り見てみ」
「お～なかなかの広場じゃん」
「あれ?ここ昨日…」
　周りを見渡してみると辺り一面木が一本も生えていない…木が全て吹き飛んで出来た広場になっていた
「緑狼ちゃん、俺らを戦わせる為に森を吹き飛ばしたのか?」
「いや、私はしていない。やったのはレイだ」
「!?…嘘だろ?」
「あーここ昨日の…」
　雷は驚いてレイの方向を見るがレイも心当たりがある様な仕草を

する
「面白い、レイ、戦おうぜ！手加減は無しだ」
「ＯＫわかった、『手加減しねえ』からな」
　雷はどこからか刀を取り出してレイに向ける
「じゃあ、武器の使用可、どちらかが気絶したら終了の一本勝負、いくよ」
「よっしゃあ！こい！」

　レイの拳と雷の刀がぶつかり合う

　なんかレイと戦う事になった。この広場（惨状）はレイが作ったらしいが、そんなことはどうでもいい
　レイと戦うのを楽しめればいい
　雷は腰に掛けている刀を一本抜いてレイに向ける
「よっしゃあ！来い！」
　まずは小手調べ、この刀をどう回避するかを見てレイの戦い方を見極めようとした雷だったが
　レイはそんな雷の考えを無視して回避せずに刀を腕で凪ぎ払った
「馬鹿野郎！下手したら刀に腕持ってかれるぞ！」
　思わず雷は叫んだ
「ご指摘ありがとう、でも体は丈夫なもんで」
　レイはそう言い返し刀を凪ぎ払った腕とは反対側の手で雷の腹部に拳を入れた
「がっはぁ！…なかなかの威力じゃねえか。良いぜ俺も全力でぶつかってやる！」
　と言って腰に掛けているもう一本の刀を抜いた
　小手調べのつもりだったが変更だ、これは本気で行かないとやられるな
　こいつ、俺と同格、いや、それよりも強いかもしれないな

「ほお、二刀流か…来いよ！」
（能力無しでも雷と同格位か…神様が基本の強さを上げてくれたお陰だな）
　数分間レイと雷の攻防は続いた、雷が斬りかかりレイがそれを受け流す、そんな状態が十分程続いた
「くっそぉ！良いのが当たんねえ！全て受け流しやがる！」
「お前もすげえよ殴っても殴っても全然効いてねえ！」
（私も戦いたくなってきたな、早く終わんないかな）
　そんな攻防が少し続いた後二人は五メートル程の間隔を取る
　そして雷が声を上げる
「次でラストだ！刀がぶっ刺さったら急いで永琳博士の所で診てもらいな」
「いいぜ！全力でぶっ飛ばしてやらぁ！」
　二人は同時に駆け出した一人は刀を持って、一人は己の拳で、その二つが接触する
　刀はレイの肩に、拳は雷の顎にそれぞれ同時に当たる
　レイの肩から血飛沫が…少しの静寂の後、倒れたのは雷の方だった
「レイ凄いじゃん！まさか雷に勝っちゃうなんて！」
「いや、俺はこの能力のお陰で気絶に対する耐性がついてただけで、普通に戦ってたら多分負けてたよ」
「なんだよ～レイは能力持ちか、なら負けてもしゃあないか」
　もう起き上がってきた雷が言った
「結構全力でやったからもう少し寝てると思ったけど回復力も半端ねえな」
「へ、伊達に西地区警備隊隊長はやってねえぜ」
「それに雷、おまえと戦った時にレイは能力を使っていないぞ」
　緑狼のその言葉に雷は驚きの声を上げる
「おいじゃあ、今までのは本気じゃなかったのかよ！」
「まあね、でも能力を使わないで全力で行ったぞ」
「おいおい！納得いかねえぞ！能力ありでもっかい勝負…!?…」
　突然大きな爆音と共に強烈な風が吹く。雷は体を守るために体を

丸めるがそれでも二、三メートル飛ばされてしまう
「何が起きたんだ…!?嘘だろ…」
雷は驚愕した目の前には殴り掛かる緑狼とそれを片手で受け止めたレイがいた
二人の周りは殴った時の勢いで地面が大きく削れていた
「まあ、こんなもんだ。お前には少々無理がある」
「雷には悪いが能力ありで戦えば緑狼と同じ位の強さはもっている」
雷は悟った。この二人は次元が違い過ぎると

第１０話　都市外周警備

雷との戦闘が済んだ後、このまま都市の外周を警備するということで、三人で森の中を歩いていた
レイの能力の事や雷と緑狼の関係の事などを話していたが
転生関係の事はまだこの世界の誰にも言っていない
「にしてもレイってかなりの戦闘能力を持ってるけど、何か訓練か何かしてたのか」
「いや、何もしてないよ、攻撃が来たから避けて、隙が出来たらそこに拳を入れる感じ」
「そんな無茶苦茶な方法で何でこんなに強いんだよ」
実は神様からのプレゼントで元から基本能力が人間の五倍あるなんて
言えないし言わない
「そういえば私の連続攻撃を全て避けた上にそこに拳を入れてきた事があったね」
「ああ、攻撃力を下げる代わりに攻撃の数で攻めてたんだっけ」
レイと緑狼が初めて出会い、戦った時の事である（第三話）
「まじかよレイの能力、体を操る能力だっけ?すっごいな」
「全てのスピードを上げるなんてかなりの無茶をしたよね」
「あれは、自分でも無茶苦茶だと思ったけど、能力で出来る事は全部イメージなんだよね」
どれか一つの事柄、あの時はスピードだったが『思考スピード』『攻撃スピード』『移動スピード』を
一つの『スピード』としてまとめて上げたのだからレイのイメージ力の異常さが分かる
「しかも攻撃を捨ててって言ったけど一発一発が雷の一撃位の威力があるんだもん」
「元が強いからね」
「その攻撃を連続で受けて耐える緑狼ちゃんも凄いと思うけど」
そんな、先ほどの戦闘に関しての話をしていたのだが、突然緑狼が

「あ、近い」
　それに反応するようにレイも
「ん？どうした？…ああ、誰だ？」
　一人雷だけが分からない
「どうしたんだよ、誰かいるのか？」
「誰だかは知らないが前方に生き物が居る」
「流石に人間には解らないか、妖怪だよ。それもかなりの強さのね」
　緑狼には妖怪同士という事でなにかを感じるのか、能力で聴覚を発達させて何かの音を聞き取った
　レイとは違い、妖怪という事、しかもここらでかなりの強さを持つ妖怪だという事もわかった様だ
「まあ、かなりの強さと言っても雷でも倒せると思うからちょっと一人で倒してきてよ」
　その言葉に雷は驚愕する。緑狼がかなりの強さを持つ妖怪と言った事もある
「え！でも、レイもまだ妖怪と戦った事無いし！二人でやった方が！」
「大丈夫だ、雷。言い方が悪かったな。ここらでかなりの強さを持つって言っても
　雷一人で倒せると思うし危なくなったら私が殲滅する」
「そうか？緑狼ちゃんが言うなら信じるが…」
「それに、レイは一度妖怪を倒している。そいつの上位種をな」
「??」
　三人の前に緑狼が言っていた妖怪が現れた。３メートルはありそうな巨体、太さは五十センチはある、
　レイは昔、テレビでみたアナコンダという蛇を思い出した。牛や馬等の獲物を捕まえて、そいつの体を締め付けて
　身体中の骨をバキバキに折り、死んだ獲物を喰うそうだ。
　そんな事を思い出し少し恐怖したレイだったが、少し前にこいつよりも一回り大きい奴を
　一発で粉砕したのを思い出した。
「長の仇！」

「ああ、あの時石投げたら逃げてった奴か」（実際はあの時近くに居た緑狼に怯えて
逃げただけ）
「こいつか、倒せるか？」
雷はまだ、自分に自信が無さそうだが、緑狼の能力を使っていないレイでも倒せるという
言葉を聞いて雷もやる気になった様だ
「おっしゃ、来い！」
「ふん、仇をとるのは最後にしてやる」
そういって蛇が雷の方へ近づいて来る。それをみた雷も蛇に向かって駆け出していく
そして最初に攻撃を入れたのは雷だった
「おらあ！」
バキッという音と共に蛇の顔がのけ反る
「なんだ、大したこと無いじゃんか「気を緩めるな！」うん？」
倒したと思い気を緩めた雷に蛇は仰け反った頭を降り下ろし、その頭を雷に叩きつけた
その勢いで砂ぼこりが舞う
「お？雷やるじゃん」
そんなレイの声と共に砂ぼこりが消え、見えてきたのは
自分の顎に刀が突き刺さり動けなくなった蛇と、驚いた顔で刀を持っている雷だった
雷は刀を縦にして、蛇が降り下ろした頭にそのまま突き刺したのだ
「やったぜ！初撃破だ！「バカ！刀を横に振れ！」うん？」
「お、のれ、小癪、な「うわ！生きてんじゃん！」ヴギュ！」
雷はまだ生きていた蛇に驚き、蛇に突き刺さったままの刀を横におもいっきり降ると
雷のかなりの力により蛇の体が真っ二つになり、今度こそ絶命した
「焦った、まさか生きてるとは」
「最後まで油断するなと訓練の度に言ってるだろう」
そう目の前に死体があるのにもかかわらず三人は会話を続ける

「じゃあ、今日の所は終わりにして帰ろう、初めての外周警備だもんな、レイも雷も疲れただろう」
そう、緑狼が言ったところで三人は都市に戻る事にした
「だな、俺の部下たちも外に興味があるだろうしさっさと戻って自慢してやるか」
「俺は雷と戦っただけでなんもしてないな」
「まあまあ、明日から好きなだけ戦えるから我慢してね」
レイ達三人は都市へ戻っていく…

都市外周警備隊移動中…

第11話　緑狼の気持ち

もうこの世界に来て一ヶ月がたった
あの日、雷と戦った日からはずっと1日中外の森で都市に近づいて来る妖怪を倒しながら
能力の制御を訓練していた
そして、都市外周警備隊隊長に命じられたり
今日もいつも通り都市の外を警備しに行こうと家（都市管理センター58階）からワープ装置目指して歩いていた
時の事
「あら、レイじゃない」
「あ、永琳どうしたんだ？」
「緑狼が何処に居るのかしってる？」
「今日は朝早く出かけたぞ『今日は用事があるから先に行くね！』って」
わざわざ能力で声帯を弄って声真似する
最近は肉体を操作するのも慣れてきて、いまなら切断した腕を自分と全く同じ形にすることもできる
「貴方もずいぶん能力を使いこなせる様になったわね」
「だろー、最近頑張ったんだよ！で、何の様だ？」
「ああ、そうだったわね。ちょっと都市の外に行きたくて、私の警備をしてくれる人を
探してたんだけど
緑狼が居ないならレイでいいわ。少し警備を頼めるかしら？」
「ああ、問題無いけど、薬草か何かを採りに行くのか？どんな薬草か教えてくれれば
一人で行くぞ。外危ないし」
「気持ちは嬉しいけど、はい」
といって二枚の写真を見せてきた、写真には同じ花が写っている
「なにこれ」
「貴方にはこの二つの花の違いが分かる？」

「うえ!?」
　永琳によるとこの花、どちらかが今回必要な薬草で、反対が猛毒の花だそう
「えーと、葉っぱの形が違う？」
「残念、違うわ…そういうことよ」
「あー、はい。じゃあ一緒に行こうか」
　要はこの違いがわからない俺一人には任せられないって事ね
「この花は南地区の外側の湿地帯に生えてるの、南地区の外は慶、レイはまだ会ってなかったね
　黒波　慶（くろなみ　けい）、南地区の警備隊隊長で能力持ちよ」
「ほえー能力持ちか、強いのか？」
「確かに強いけど戦わないでね。今日は私の護衛なんだから」
「ハーイ」
（これでレイの事が少しでも分かれば良いけど）

　数時間前　永琳の研究室にて

　私の朝はコーヒーから始まるのが日課だ
　朝食、昼食、夕食はサプリで十分な栄養を摂り、余った時間を研究に費やす私だが
　睡眠そして朝のコーヒーだけはゆっくり過ごすことにしている
　栄養はサプリで補えても疲れは寝ないと治らない、その問題を解決するために疲れを取る
　薬も作ったのだが問題は精神面の疲れは取れない事で、
　その薬は無駄になったと言う事があった
　その為に睡眠は研究を効率よく行う為にも睡眠は十分取っている
　そして起きた後のコーヒーで眠気をさますのが何時もの日課になっている
　そして今日は週に一度の休みの日、五十年ほど前に緑狼が、毎日研究ばかりで辛くないの？　と聞いてきたのが

始まりだった。それからずっと週に一度は研究をしないでゆっくりすごす事にしている
そのお陰か私の研究は効率良く進み、今では都市の人間の平均寿命は２００年を超えた
このまま研究を続ければ、長年の夢である不老不死の研究が成功する日がくるかもしれない
ドンドン！
「永琳ーいるー？」
私のゆっくり過ごすという今日の予定は変わるかもしれない。
私の家、都市管理センター１５０階に来たのは緑狼だった
「居るからもう少し静かにしてくれない？」
「そうなの？ゴメンね♪今度から気をつけるね」
「はあ、で何のよう？こんなに朝早くに」
今の時間は朝6時、緑狼と一緒にくらしているレイもまだ寝てるのではないだろうか
「そうだ！私、死ぬかもしれない！」
「…はあ？　何言ってるの？どうも死にそうに見えないわよ。確かに顔が少し赤いけど」
「でも！前までこんなこと無かったし！」
「まあいいわ、どんな時にどんなに症状が出るのか教えて頂戴」
緑狼の診察によって分かった事がいくつかある
・レイと一緒に居ると動悸に異常が起きる
・レイと話すと動悸に異常が起きる
・レイと全力で戦ってると動悸に異常が起きる
・他の人とはそんな事はない
・他の人と話をしている時にレイの話題が出ると動悸に（ｒｙ
「…はあ…何となく予想は付いたわ」
「本当！生きれそう？死にそう？」
「はあ…恋よ…（何でこんな事を言わなくちゃいけないのよ…）」
「うえ!?嘘でしょ!?私が？」

緑狼は本気で驚いた顔をして詰め寄る。勿論顔は真っ赤だ
「貴女、気づかなかったの？この症状（？）全てあてはまるわよ（三番目は知らん）」
「そんな訳……あるのかなあ」
緑狼は顔を赤く染めて俯く
私は研究に没頭していて恋愛なんてしたこともないしするつもりもない
しかし、緑狼にそこまで惚れさせる奴なら興味がある
「それなら、緑狼はレイともっと一緒に居たいの？」
「え…でも…もういっしょに住んでるし警備場所も一緒だし…」
ここまで顔を赤く染めて弱々しく話す緑狼も珍しい
警備隊総隊長のこんな姿、部下達が見たらなんと思うか
「じゃなくて、恋人同士になってその先へ…とか？」
「え？……は〝う〟っ／／／」
謎の奇声を上げてその場に倒れる緑狼
どんな事を想像したかは気になるが、まずは緑狼を寝かせなくては

そんな訳で今は緑狼には私の家で休ませている
「で、南地区の黒波　慶がどうしたって？」
「ああ、ごめんなさい、少し考え事をしてたの」
「そうか、歩きながらの考え事は危ないぞ」
「そうね、気を付けるわ」
どうやら、人に気を遣う事が多いようだ、こんな人間はなかなか居ない
「まずは、黒波隊長に都市の外で活動することを伝えなくちゃいけないのよ」
「へえ、都市の外で活動するのに許可が要るのか？」
「いや、南地区だけよ。ほら、最近警備隊隊長が全員都市外周警備に移動した事が
あったでしょ」

「ああ、あったね」←都市外周警備隊隊長
「あれで四地区警備隊隊長含め総勢八人が都市外周警備隊になったんだけど」
「ああ、そうだな」←割り振りは緑狼に任せている
「今、南地区の外周警備を黒波隊長がやってるのよ」
「へー」←せめて外周警備隊の集合位行けば良かったと思ってる
「そして今は黒波隊長に一度挨拶していかないと、狙撃されるの」
「ふーん…うぇ!?」
狙撃ってなんだよ!?と驚いた表情で永琳に聞く
「黒波隊長は『的に当てる程度の能力』狙った物に必ず命中させる能力よ」
あ、程度って言うのは『それしか出来ない』っていう意味で黒波隊長が使い出したのよ、と
永琳が付け足す。何だ黒波って奴が『程度の能力』って呼び方を始めてたんだ。
俺も『体を操る程度の能力』に
変えよっかな。『身体に関係する事なら何でも出来る事しか出来ない能力』
…無茶苦茶じゃねえか
俺は『程度の能力』は要らないな
「だから、黒波隊長は都市の外壁の上から目に入った妖怪を片っ端から撃ち抜いてるの。
つまり一度黒波隊長に都市の外で活動することを伝えなくちゃ間違って狙撃されるかもしれないのよ」
「それは、おっそろしいな」
「だから、まずは黒波隊長のいる…多分外壁の上かしら…そこに行って外で活動することを伝えるのが先よ」
「はーい、じゃあ行きますか」
二人はワープ装置目指して歩いていく…

第12話　レイと永琳と慶

　二人は南地区の外壁近くのワープ装置にたどり着いた
「ここが南地区か、西地区とは空気が違う気がするなあ」
「ここらは乾燥しているのよね、だから目的の花が育つ訳だけど」
「へー、都市が広いからいろんな所にいろんな気候があったりするのか？」
「ええ、北地区は外の地区よりも寒かったり東地区は少し湿気てたりね」
　レイと永琳はここの隊長である黒波隊長を捜すために都市の外壁の横を歩いていく
　いきなりズドンと大きな音と共に辺り一帯が眩しく輝く
「あ、いたいた」
「え？あ、アイツか」
　永琳が指を指す先には外壁の上にまたがり、狙撃銃を外の草原地帯に向け、外を見渡しているの人影が見えた
「当ったりぃ♪」

　見た目は赤みを帯びた白い髪をしていて黒いメガネを掛けている
　学校の制服の様な服装をしており、レイはこの服装に前世の記憶で見覚えがあった
（あ、月の兎達の…）
　持っていた狙撃銃をくるくると回し、ご機嫌な様子だ
「あんたが南地区隊長の黒波か？」
「うん、そうだけど…あ、あのときの死人君！」
「し、死人君って…初対面の相手に…あ！あのときのメガネ野郎！」
　その言葉を聞き、少し驚いた顔をしてからクスリと微笑み
「覚えててくれたんだ♪…でも、僕は野郎じゃなくて女の子なんだよ♪」
「うぇ!?男かとばかり…すまないな」
「いいのいいの、気にしないで♪よくある事だから「コホン」おろ？」

永琳のわざとらしい咳払いでレイは目的を思い出す
「あ、そうだった「都市の外に行きたいんでしょ♪永琳博士を連れている時点で分かるよ」…せーかい」
「と言うことで私とレイが外で薬草を集めている間、間違えて撃たないでね」
「はーい、じゃごゆっくりい♪」
えらく軽い挨拶を交わし、レイと永琳は都市の外に出る
「あなた慶と知り合いだったの？」
「いやあ、少し前に会った事が…」
一ヶ月程前にレイが転送装置で分裂した時に転送装置の目の前でぶっ倒れてたレイの脱け殻の方を
道端まで運んで眺めてたのが慶だったりする
あのときは慶が白衣を着てたためレイが素で男かと思っていたのだ
「…まあ、あの子白衣着てる時は男にしか見えないからねえ」
と、永琳が言う
あの服はあまりにも男に間違えられる慶が自作した物だそう
「男に間違えられるってなかなか珍しい人だな」
「そうね、ほら慶隊長の許可が済んだなら早く探しにいくわよ」
「はーい」

小一時間歩き続けると一面真っ赤の花畑が見えてきた
「これはこれは、なかなかの絶景だこと」
「そんな事は良いからそっからそこまでの花を摘んできて」
「はー…毒草はどう見分けんの？」
「毒草も使うの、早く行ってきて」
「はーい…」（何で永琳着いてきたのさ…）
レイを観察するためです

約三十後

「永琳ー終わったぜぇ」
「お疲れ様、じゃあ戻るわよ」
　と永琳が言った直後である
ピ、ピ、ピピピピピピピピピピピピピピピ……
「なんだ？」
「どうやら面白いイベントが観れそうね」
　永琳は白衣のポケットからピンクのスマホの様な物を取り出した
その機械は一分程なり続け、何も無かったかの様に静まり返った。
　永琳いわく今の音は半径五百メートル内に妖怪が近づいてきた時
になるらしい、ちかくの穢れを探知するそう
　そして、ピ、の数だけ妖怪が居るらしくて
「団体様ってことか」
「でも、ここは慶隊長の管轄、貴方もあの子の実力を見たいんじゃない
の？」
　永琳がそう言った直後、二人の上を何かが飛んでいく、レイの動体
視力で解ったがどうやら弾丸のようだ
　やがて飛んでいく弾丸の間隔が短くなり、雨の様な勢いでレイ達の
いる花畑の先へ銃弾の雨は飛んでいく
「あれはね、私が作った慶専用連射型狙撃銃でね」
「待て待て、こっから慶のいた外壁まで五キロはあるぞ、その距離を連
射じゃ…」
「何言ってるのかしら？私の作った武器よ、十キロ先まで弾の勢いが
失われないわ」
　無茶苦茶だ　そう思った時、あの人のセリフが降りてきた
「…この時代でも常識は通じないんですね」
「ふふ、私にとっては常識よ、ほら敵の数がどんどん減ってく」
　永琳の持っている装置には画面が付いており画面の中には数百は
あるオレンジの点が
　かなりの勢いで消えていく。これが妖怪なんだそう
「ほー、強いなあ…四、五発で一匹って所か」
「ほら、どんどん減ってく。もう百匹位しか残ってない」

永琳の言う通りオレンジの点はどんどん減っていき、最後の一つになった
…そう、『最後の一つになったまま、減らない』のだ
「あら、かなりの強者が居たようね」
「あらら、そりゃ大変だ」
などと事態を軽く見ていた永琳だが、流石に一分も攻撃が続いても消えない妖怪の反応には
様子を変える
そして、銃撃が一旦止み、永琳の足元に攻撃が行く
「あぶね！」
「きゃあ！…ありがと」
いち早く攻撃に気付いたレイが永琳を持ち上げ、永琳に怪我は無いのだが銃撃は二人の目の前の地面に続いている
やがて、銃撃が止む頃には地面に銃跡で
『〝オサ〟ガイル。キケンダ、イマスグニゲロ』
と書いており、それを見た永琳は表情を一変させる
「嘘、長クラスが何で都市の近くまで…レイ！今すぐここを離れるのよ！長なんか貴方も殺される！」
「長、偉そうな名前してんな」
「良いから！早く逃げるの！一旦都市まで戻って緑狼をよぶのよ！…最悪ツクヨミ様にも助けを呼ばなくては」
「まあ、手遅れみたいだけどね」
「え、あ、嘘!?嫌、死にたくない!!!」
その直後、レイ達の上を何かが掠めていった。慶の攻撃ではない、そもそも向きが違う
その攻撃は『都市の方角』へ飛んでいったそれは、レイの記憶にもあった
都市に初めて来たとき、ツクヨミの霊力弾をくらい、半身が消し飛んだ。それと同じ雰囲気がした
「え？あっちには都市が…嘘!?」
ズシン…

そんなに音がした。都市に攻撃届いたのかは分からない
ただ慶からの狙撃は一切来なくなった
レイと永琳の前には…猫がいた
猫だけならまだ可愛いのだが見た目と大きさが問題だった
トラックと同じ位であろうその体には体毛は一切生えておらず、慶の攻撃のせいか体のあちこちから血が滲んでいる
…そう『滲んでいるだけ』である。そのうえ背中からは十本程の触手が蠢いており、そのうち数本の触手の先には
他の猫の妖怪の死体が突き刺さっている
「あ、ああ、嫌、いやあああぁぁぁあああぁぁっっっっっ!!!!!!」
永琳は絶叫した
思い出したのだ、まだ自分が幼いが故にまだ兵器が揃っておらず
緑狼の戦闘だけで人間達が生きていられた頃、こいつと全く同じ奴に出会ったことを
まだろくに発展しておらず、ビルではなく一軒家が今より小さい都市に敷き詰められていた頃
『妖怪の都市の一斉襲撃』
緑狼一人では抑えきれず都市に、いやあの頃は街とでも言うべきか…街に妖怪が流れ込み
どんどん殺されていく人間たち、喜びの表情で人間を狩っていく妖怪達、自分を地下深くのシェルター行きのカプセルに押し込む両親、笑顔で泣きながら妖怪に掴み上げられる母親、頭を食いちぎられ動かなくなった父親
「あなただけは生きて、永琳…」
「いやあああぁぁぁあああぁぁっっっっっ、おかーさんっっっっっ！行かないで!!!!」

「うわ、気持ちわるう……でも、女の子泣かせるとは許せないねえ、猫さんやあ」
レイは妖怪に向かって歩いていく
「やめて!!アイツには勝てない!おねがいっ逃げて!!」
レイは小石を拾い上げ、猫に向ける
「早く逃げて!!ソイツは緑狼でも撤退させるのが手一杯だったの!」
レイは小石を持った手を振りかぶる
「女の子泣かせたらどうなるか…」
石はレイの手を離れ、音を置き去りにしながら飛んでいく
「その身をもって知りやがれえ!」

その小石は猫の左目を弾け飛ばし、頭を貫通して、後ろの木に大穴を開けた

第13話　〝長〟の実力

猫は生きていた。しかし先ほどのレイの一発で左目と脳を一部失い、先程の銃撃とは比べ物にならない程のダメージを受けていた
「え、嘘、あの猫に、そんな！」
「永琳は俺の強さを勘違いしてんじゃねーの？」
「え？」
その時、猫の背中の一本の触手に何かエネルギーを集まるのを感じた
「お前らか、我等の侵攻を妨げる者は」
「我等（独りだけ）…ぷっ」
直後、レイの右腕がズルリとおちた
永琳が驚きの声を上げるがレイは気にすることなく腕を復活させ、落ちた腕を拾い上げる
「なんだ？煽り耐性すらついてねーのかよ」
「ソイツの攻撃はカマイタチの一種よ！攻撃が見辛いから注意して！」
恐怖から未だに復活出来ない永琳は震えた声で敵の特徴を述べていく
「永琳サンキュ、でも少し休んでろ。こんな雑魚直ぐに片付く」
レイは腕の切断面を見て嫌そうな顔をしてから、猫の化け物に腕を放り投げた
「喰ってみ、旨いかもよ」
猫は当然の様に腕に食い付き貪り始める
「隙ありぃ！」
レイは腕を喰っている猫の頭に踵落としを喰らわせる
「うぇ!?」
「猫の瞬発力を舐めるなよ」
猫はいつの間にかレイの後ろに回って、その持ち前の爪をレイに降り下ろした
しかしレイも簡単に殺されはしない

「そんな身なりしてまだ猫を言い張るか」
「五月蝿ぃ!!黙れぇ!!」
猫はレイから十メートル程離れ、背中の触手を全てレイに向ける
「なんだなんだ?地雷踏み抜いちゃったか?」
ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド
猫からの触手の連撃をレイは動体視力を上げて苦もなく避け続ける
そしてレイは一本の触手を掴みとり
「そおぃ!!」
自分を方へ引き寄せ、その勢いで猫のもう片方の目を殴りつけた
パアン
そんな破裂音がして、猫はよろけた
「うがああぁぁあああぁあぁっぁぁぁぁっぁああぁ」
「なんも見えねえか、可哀想に」
「お〃の〃れぇぇ!!」
レイは見たことの無いような笑みを浮かべ、
「ばいばい」
そう言った直後、猫の腹部が破裂した
猫のトラックの様な巨体がグラリと傾きズシンと地面を鳴らして猫はそれきり動かなくなった
「何よ、あれ?」
「どした?ああ、あれ?あれ俺の腕」
猫の破裂した腹からは無数の触手が蠢いている。どうやらあれが爆発的に増殖して猫の腹を突き破った様だ
しかしその無数の触手も姿を変え、最後には先程猫に喰われた腕の形になっていた
「貴方異常よ」
「よく言われる」
その時、二人の上空から声が聞こえた
「レイ!永琳!大丈夫!?」

その声の主は緑狼だった
「おー緑狼！朝振りー」
「どうやらこの様子じゃ無事なようね」
「でも、どうしてここに居るって分かったのかしら」
「いやー本当に都市の方が凄かったのよ、まあ、歩きながら話すわ」
移動中に少し話を聞いたところ緑狼が都市の外を警備中大きな妖力を感じ、その直後南地区外壁付近で
大きな爆発があったとの報告を受けて現場に直行
現場では外壁を含むかなりの範囲が焼失　外壁付近のビルが二棟崩壊、五棟が傾くといった大惨事に
なっていて、南地区警備隊隊長が全身に大怪我を負ったとなれば異常事態であることが誰の目にも分かる
慶が意識を失う直前にレイと永琳が妖怪に近い所に居ると聞き、全速力でここまで来たそうだ
「あれ？じゃあ俺ってヤバい奴と戦ってたわけ？」
「うん、最近は長レベルの襲撃がほとんどなくなって来たと思ってたけど…」
「長？あの蛇も長だったよな？」
「え？ああそうだよあのときは私死ぬ覚悟で突っ込んだら終わってるんだもん」
「貴方アイツ意外にも長レベルと戦った事があるの!?」
「うんまあ、だから今回も大したこと無いと思っててな」
「もーあんまり無茶しないでね、相手の力量を量るのも大事なんだから！」
「仲良く話しているのもいいけどそろそろ都市に着くわよ」
そこは先程まで慶と話していた空間ではなかった。あちらこちらから警備隊員の叫び声が聞こえ、皆必死に救助活動
を行っているのがわかる。平らだった地面はすり鉢状に吹き飛び、爆発に巻き込まれたであろう建物は傾き、
今にも崩れそうである。
「こりゃ大変だな」

「こんな事、第二世代じゃ初めてじゃないかしら」
「第二世代？永琳、なんだそれは」
　そうレイが聞いたが永琳に走ってくる隊員の声に遮られてしまった
「…ええ、解ったわ。今すぐ仮設テントを建てて怪我人を集めて、そして都市中の医者を緊急招集」
「ハイ、ワカリマシタ！」
「ごめんなさい、怪我人の治療をしなきゃならないの」
「そう？なら、私達は都市の人達を集めて救助活動をさせるね」
「よっしゃ任せろ！」
　と言ってレイと緑狼は走っていく

「大丈夫ですか？」
「はい、でも家の子供が」
「なんだって!?この瓦礫の下にか？」
「はい、助けてください！お願いします！」
「し、しかしこの大きさの瓦礫は西地区の警備隊位じゃないと」
「おい！大丈夫か？」
「あ！あんたは西地区新入隊員の！」
「良いから！俺が瓦礫を退かすから、子供連れてこい！」
「わ、わかった！」
　上空を瓦礫が飛んでいく
「なんだあれ!?」
「緑狼じゃねーのっとよっこらせ」ガラガラガッシャン
「あ、そうか、なら普通か」
「ワーンオカーサン」
「わー！美香ちゃん大丈夫!?」

「おーい！西地区警備隊員が到着したぞ！」
「うおーー！これで進むぞ！」

「西地区警備隊って何であんなに強いんだよ」

日が沈む頃には人命救助、瓦礫の撤去（都市の外に）が完了した
そして、仕事を終えた隊員たちは一ヵ所に集合していた
たけし「俺、瓦礫ぶん投げてやったぜ！」
まきお「おれ、幼女にありがとう、おじさんって言われたんだぜ」
のぼる「オレ、ずっと緑狼総隊長の手伝いしてたんだぜ！」
レイ「俺、原因の妖怪ぶっ倒して来たぜ」
「「「あ、レイさんちわーす!!」」」
「おい静かにしろ！総隊長が来たぞ！」
「「「はーい、ごめんなさい」」」

そして隊員総勢１５０人の前に緑狼が立つ
「今回の活躍ご苦労様、今回の事件は都市に接近してきた〝長〟クラスの妖怪が原因だ。そして明日、都市外周警備隊隊員は都市管理センター１０階の多目的室に集まってくれ！一般隊員！そして、救助活動の手伝いをしてくれた一般市民のみんな！本当に有難う！では、解散!!」
そう言って緑狼は去っていった
それにつられるように隊員達もバラバラと別れ都市の中に消えていく
「じゃ、俺も帰るか」
「私を置いてきぼりにするつもり？」
「お？緑狼先に帰ったんじゃないの？」
「永琳と話していただけ、早く帰ろ」
「そだね」
二人も都市の中に消えていく…

第１４話　『妖怪の都市の一斉襲撃』

南地区外壁付近で爆発があったり、長の襲撃で本当は都市の危機だった日の次の日
都市外周警備隊隊員は全員都市管理センターの十階多目的室に集められた
人数は全員で都市警備隊総隊長の緑狼＋都市警備隊隊長四名＋西地区警備隊の五名の計十名で
今はミーティング開始の１０：００までは基本的に自由なので後五分間は緩く過ごしている
「昨日の襲撃？はヤバかったな」
「ああ、話によると原因の妖怪は緑狼総隊長がぶっ飛ばしたそうだぜ」
まきお「え？あいつはレイさんが「良いんだよ、そうしとけ」…」のぼる「それでいいのかレイさんは」
レイ「良いよ良いよ、みんなが知らない方が自由だし」
たけし「不思議な人ですね」
「ほら、もう時間だぞ」
「「「はーい」」」
先程までは緩やかな雰囲気だった室内だが、時間が近づくにつれ、ピリピリとした真剣な雰囲気になっていく
そして緑狼が立ち上がり、一度礼をしてから話を始める
「そうピリピリするな、別に敵同士では無いだろう。
では、まずはこの場で初めて会う人間も多いだろう、まずは自己紹介から始める」
『はい！』
緑狼「皆、知っていると思うが私から都市警備隊総隊長の緑狼だ。外周警備では主に全体を　　守っている」
御霊「じゃ俺ね、西地区警備隊隊長の御霊　雷で外周警備はそのまま西地区の外周を守ってる　　ぜ」
黒波「ん？ああ僕？南地区警備隊隊長の黒波　慶です外周警備は南地区の外壁で妖怪を撃ち抜　　いてるよ♪」

常葉「妖怪にビビって外壁から動かない上に妖怪に大怪我させられている黒波　慶ですに言い　　換えた方が良いんじゃねーのケケケ「へへへへごめんね、じゃあ次はサボりで救助に来なかったあんた自己紹介、頼むよ♪」うっせーな」

八橋「じゃあ私？北地区警備隊隊長の「おい！ふざけんなバカ！次は俺！常葉（ときは）様だろ！」…　　の八橋（やつはし）です」

うわあ

…誰が誰だかわかんない

レイ「レイです」

たけし「たけしです」

のぼる「のぼるです」

常葉「お前ら適当だなあ!?」

まきお「のぼる2です「嘘吐けえ！」…まきおです」

きよし「きよしです「誰だよ!!」え…ええ!?」

ちなみにきよしは「お前ら静かにしろ！総隊長が入って来たぞ」の人です

緑狼「では、自己紹介が済んだところで本題を話そう」

その言葉により、一度壊れかけた空気がピッと固まり、真剣な空気になる

緑狼「昨日、少し話したのだが妖怪の〝長〟についてだ」

そして、妖怪の〝長〟についての解説が始まる。

「君達が今から聞くことは都市の最高機密であり他言無用だ、その事を頭に入れて聞いて欲しい。

君達の住んでいる都市は『一度、妖怪の手によって滅んでいる』」

緑狼のその一言に皆は驚愕の表情を見せる。

御霊「…滅んだ？何を言ってるんだ？都市はこんなに発展しているじゃないか!?」

八橋「そうですよ！今まで妖怪が襲ってきても対妖怪用兵器で「そ

れを開発したのは誰だ？」　　え…八意博士です」
緑狼「そう、対妖怪用兵器を作ったのは八意博士だ。でもその八意博士が幼い時はここまで文　　明は発達していなかったんだよ。建物は高くても三、四階建てで都市の広さも今の半分程しかない、妖怪を倒す事が出来るのは私だけ、そんな時代があったんだよ」
常葉「どういう事だ!?そんな話聞いた事ねえぞ!!」
緑狼「そりゃ聞いた事は無いだろう、生き残りの住民は都市全体で百人も居ないからな、それ　　も五百年前の出来事だ」
黒波「嘘、じゃあ当時の出来事を知っている人は…」
緑狼「私と八意博士だけだ」
常葉「待て、総隊長は解るが八意博士？五百年以前の出来事なんだろ!?ここの人間の寿命を遥　　かに越えてんじゃねーか」
緑狼「じゃあ聞くが常葉、人間の平均寿命は幾つだ？」
常葉「え？そりゃ地区にもよるが２００年位だぜ」
緑狼「残念ながら違う。人間の平均寿命は「大体８０年位じゃね？」
レイ…正解だ」
出番の無さそうなレイが前世の記憶を頼りに答える
常葉「八十年!?そんなんここの誰よりも年下じゃねえか!?」
レイ（俺１７歳）
緑狼「そうだ、しかしその寿命の問題を解決したのが八意博士だ」
黒波「その話聞きました。私が生まれる前…百年位前まで百五十歳でご老人だったとか」
緑狼「その通りだ黒波、この速さでの寿命の伸びは全て八意博士の研究の成果だといってもいい」
常葉「そんな八意博士なら五百年以上生きてても問題が無いのか」
緑狼「問題が無い訳ではない。実を言うと彼女の体はもうぼろぼろで後、五十年も生きられない」
黒波「嘘ですよね!?八意博士が…そんな!?」
話が逸れて来たので十分程休憩を取る、皆余りにもショックが大きいようだ
レイ「で、永琳の寿命の秘密はわかったが、その永琳がそんなに死

を回避したがるようになっ　　た事件が過去にあった訳だな」
御霊「レイ、そりゃ一体どういう事だ？」
レイ「簡単だ、都市の人間の平均寿命を二倍以上もあげて対妖怪用兵器を開発したと聞く、
　　明らかに死から…妖怪による死から逃げたがってるみたいじゃねえか」
常葉「そりゃ、生き残りが百人位しか居なくなるような事件が…待て総隊長、あんた前の都市　　の大きさは今の半分程しかないって言ったな？当時の人口を教えてくれ」
緑狼「一億人だ、その人数がほぼ全滅した」
御霊「嘘だろおい！何があったてんだよ」
緑狼「やっと本題に入るな、この後は口を挟まない様に頼む」

当時の都市…いや街とでも言うべきか、街は狭いながら多くの人間が暮らしていた
私は今と同じように都市の周りをぐるぐる周りながら都市に近寄る妖怪を片っ端から殺していた
私も妖怪だ、妖怪同士で殺し合い都市の人間は戦わない、でもそんなのはおかしいとは思わなかった
妖怪に捨てられた私を育ててくれた皆の為に何か役に立ちたいと勝手に始めたことだ…
そんなある日、都市の周りをぐるぐる回ってた私は妖怪の群れを見つけた、いつも通り殲滅しようと
近寄ると…猫の妖怪の群れだった
「おい！ここから先は人間のすみかだ！妖怪がこれ以上近づくと同じ妖怪とは言え容赦しないぞ」
「あら、あんたその髪、狼の所の長に捨てられた…生きてたのか？まさか人間側に着いてるとはねぇ」
そういって猫妖怪との戦いが始まった
最初がこっちが勝っていたんだが、最初に話かけてきた妖怪、猫妖怪の長が残った。

私も全力で戦った、そして勝ったでも私は致命傷を与えられなかった、そして奴は逃げてった
今日はいつもと違う、そう思いながら街に戻ったら…
そこは自分の知っている街じゃなかった。家屋は潰れ、火が上がり、妖怪達が人間達を殺し、引き裂き、貪って、
…地獄だった
私は戦った、見つけた妖怪を片っ端から殴り、蹴り、潰し、殺し、そして最後の七匹になった。
猫の長、蛇の長、猪の長、亀の長、猿の長、熊の長、そして自分に似てる狼の長、
この七匹が私を囲んでいた。
私は戦った、この体が朽ち果てても生き残りの住民がいる限り、私は戦った
でも、勝てなかった。倒れ、動けなくなった私に狼の長は言った
「あなた、強くなったわねぇ、流石私の子供よ、あの時捨てたのが惜しい位だわ」
「お…い……どういう事だ…」
「そのままの意味よ、あなたは妖怪の中でも一番強い種族の長である私の一人娘なの、まあ
その変な髪の毛が気持ち悪かったから捨てたんだけどね」
「そんな…嘘…だ…」
「あなたは生かして置いてあげる、次に目を覚ます時はあなたの大好きな人間は一人残らず死んでるだろうけどねぇ」
「や…め…」
そして私の頭に強い衝撃が走った

気が付いたら…全てが無くなっていた。奴ら妖怪達も、人間も、建物も、私の思い出も。
でも諦めなかった。生き残りの人間を探した。三日三晩探し続け

た。汚れようが爪が剥がれようが、
生き残りの人間を探して、瓦礫の山を探し続けた。
でも生きてたのは百人位しか居なかった。でもその人間達の為、そして街を守る為に…いや、都市を守れなかった償いの為に、ええどうせ自己満足にしか過ぎないけど、街の復興の為に。最初から。まずは集落から頑張ったわ
集落の士気が下がり、病気が流行り、もうおしまいだぁってなったときは、街のみんなに何時でもお月様は見守ってるよって神様を作って皆で崇めたりした、まさか本当に神様が降りて来るとは思わなかったけど。
そして、最初の時から私を支えてくれたのは永琳だったの、あの子は薬を作るのが得意で街の皆の支えになった
そのうちに永琳が妖怪の弱点を見つけてくれてね、しかも兵器まで開発するようになってね、そこからの街の成長は凄かった。集落から街へ、街から都市へ、人口が増えていくにつれて、信仰が深まってツクヨミちゃんも強くなった
そのうちにここまで都市が大きくなったって訳。
緑狼が話を終える頃には一時間位経っていた
皆、都市の真実を黙って聞いていた

黒波「じゃあ、この都市を作り上げたのは総隊長だったんですか!?」
緑狼「私だけじゃないよ、集落、街、都市の皆で協力しあってここまで成長させたんだよ」
常葉「待て、つまりツクヨミ様は総隊長が作り上げたのか」
緑狼「最初に神様を作ろうって言ったのも生まれたツクヨミちゃんを育てたのも私だけど、民　　の皆で月を崇めて、民の皆からアドバイスを受けて今ここに居るから、私だけでツクヨ　　ミちゃんを作り上げた訳では無いかな」
御霊「つ、ツクヨミ様の親って事は緑狼ちゃん、あんたが都市で一番偉いんじゃないのか!?」
緑狼「いや、どうだろうね？確かにツクヨミちゃんを生んだのは私

ではあるし…でも今じゃツ　　クヨミちゃんの方が遥かに強いし、でも権限的には永琳が一番高いから、永琳が一番　　じゃないかな」

たけし達一般隊員達（レイを除く）は元々総隊長に話し掛ける勇気がないので黙って聞いている

（何で俺らここに居るんだ!?一般隊員が聞いて良い話じゃねえよ!!）

ここに居る人間達の気持ちは一つだった

『目の前に居るのは本当に妖怪なのか?実はかなり高位の神なんじゃないか』

と、

そして、黒波の一言

黒波「総隊長、本当は口調優しいんですね♪」

緑狼「は!あわわわわわ!／／／そのだな!あれだ!そそ、その」

レイはため息を一つ吐いて、自分の指を見えない様に切断し、砂粒程の大きさに加工して緑狼の方へ飛ばす

レイ（肝心な時にこれだから）

レイは緑狼の肩に乗った自分の欠片を操作し、耳元まで持っていき、欠片に意識を飛ばす。レイの欠片は人を形作り、耳元で囁く

緑狼「あっと!そのだな!!「緑狼!!」ひゃい!?」

黒波「あ、あの?え?えぇ?」

レイ「俺の言う通りに話せ、それでどうにかなる」

緑狼「う、うんわかった」

そして顔を赤くした緑狼は一つ咳払いをして

緑狼「こほん!えっと、こんなしゃべり方は、な、仲の良い人同士でしかしないけど、今日から都市の外周、都市の治安じゃなくて都市を妖怪から守る立場になって、ん?なったから今までの上司、部下関係じゃやっていくのは無理だと思う、だから私も堅苦しい話し方は止

めるから皆も敬語を止めてくれると嬉しいかな？」
　一同驚きの表情を浮かべ、隣の者と顔を合わせてから
「あ、ああ！改めてよ、よろしくな！」「い、良いのか？」「緑狼ちゃんは緑狼ちゃんだな」「あまり慣れないが宜しくお願…よろしくな！」
「僕も緑狼ちゃんって呼ぼうかな♪」
　など思い思いに話し始めた
ただ、様子がおかしいのは一般隊員組である、五十年位ずっと部下だった一般隊員組は
隊長と総隊長にいきなり敬語を止めろなんて言われてもできる訳がない。

　余談だが慣れるまで一ヶ月位かかった

緑狼は肩に乗っていたレイにしか聞こえない位の声量で
「レイ、ありがと助かったよ」
　って言ってたりする
しかしそんなに和やかな空気を恐怖の空気に塗り替える一言がレイの口から飛び出した

「そんな緑狼でも敵わない妖怪の長が最近都市の近くにうろちょろしてる件について、どう思う？」

「「「「「「「「「！！！！？！！？！？！！？！？！？！？」」」」」」」」」

　起こったのは
　　静寂だった
緑狼でも敵わない妖怪が最近都市の近くに寄って来ている
　考えたくなかった、知りたくなかった、

しかし、真実である

「まあ、心配しないで」
緑狼の一言は皆を安心させるのには十分だった
「確かに長達は強い、でもそのうち一匹は昨日倒した。その事で他の長達も襲撃を控えると思う。」
そして緑狼が一呼吸置いて
「だから、妖怪達が近づかない内にある計画を始める」
緑狼はここに居る皆の顔をじっと見てから
「『月移住計画』、都市の人間皆で月に逃げるの」

周りの空気が凍った、ただ一人レイを除いて
（始まったな）